

---

## 闇守護業 3 《紫花》

祐太

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

闇守護業 3 《紫花》

### 【Nコード】

N6711A

### 【作者名】

祐太

### 【あらすじ】

近未来の日本には、荒廃した無法地帯『裏社会』があつた。そんな光の届かぬ闇の世界で、守護を貫く者達がいる。『闇守護業』第三話は、暗闇の過去に迫るシリアスストーリー。果たして真実は？

《誓い》

その男、数多の屍の上に立つ。

闇を司りし、心死す者。強き身は抜け殻。

ただ、男は誓った。『もう誰も求めぬ』と。

求めてはならぬ、愛してはならぬ、欲してはならぬ。

生きながら、苦痛の果てに死ぬのだ、鬼よ。

《破壊》を定められし手を呪い、男の嘆きの叫びは響く。

それはヒトには聞こえぬ悲鳴。それはヒトにはわからぬ痛み。

……《鬼》が救われることなど、有り得ないのか……。

主な登場人物紹介（前書き）

主たる登場キャラクターの紹介です。

『闇守護業』はシリーズ物ですが、この紹介を読めば初めての方でもおわかりいただけるかと思えます。

## 主な登場人物紹介

『闇守護業』 主な登場人物

蒼波 遼平…21歳

紺色のやや長い髪は寝癖でいつもボサボサ、瞳は漆黑。裏警備会社中野区支部社員の男。「最低最悪の裏切り者、《邪鬼の権化》」と呼ばれているらしい。

『音の民』蒼波一族の末裔で、普通人間には聞こえない超音波を聞き取り、発する能力を持つ。蝙蝠と意思疎通が可能で、吸血蝙蝠「宋兵衛」と契約を交わしている。肉弾戦が得意。

面倒臭がりでキレやすい。頭の回転は鈍く、ほとんど勘で行動。ふざけた態度と感情的な言動、かなり野生的。自己中心的な性格。

純也…?歳

白銀の髪、ライトブルーの双眸。裏警備会社LK中野区支部の社員兼治療員担当の少年。見た目は15〜6歳くらいで、現在は遼平のアパートに居候中。

2年前、遼平に拾われた時以前の記憶が無く、覚えているのは自分の名前らしき『純也』と膨大な医学の知識だけ。どこの誰なのかは一切不明。風を操る不思議な特殊能力があるが、普段は専ら合気道に近い武術を使う。

穏やかで非常に優しく、記憶力・洞察力に長けるが子供っぽい。趣味は料理と折り紙、更に大食い。身長が低く遼平より頭一個分下。人や動物を傷つけることを嫌い、殺生を憎む。

霧辺 真… 25歳

金の跳ねた短髪。瞳は黒で、皮膚は浅黒い。裏警備会社LKの若き中野区支部部長。関西弁を話す、自称『愛の警備員』であり、自らのことを『死人』とも言っていた。

普段は腰に下げた木刀で敵を薙ぎ払うが、それは鞘であり、中に凶刃『阿修羅』が収まっている。とある流派の剣術を使用するようだ。

いつもは賑やかな遼平達の傍観者だが、最近は特に部下にいじられ気味。メンバーの中では最もマトモな感性の持ち主。最近、メンバーの非常識な言動に胃薬が手放せない、苦勞人。一度暴走し始めてしまった部下（主に遼平）を止める為、ハリセンを常に携帯している。実は物凄い愛妻家。

紫牙 澪斗… 22歳

淡緑色、ストレートな短髪。瞳は暗褐色。裏警備会社LK中野支部社員の男。かつて暗殺成功率百パーセントの殺し屋、《消去執行人》（エクスキューショナー）との異名を持っていた。

仕事にかけている眼鏡は別に目が悪いわけではなく、希紗の作った照準グラス。ちなみに、澪斗が専ら使用するカートリッジ式銃『ノア』も希紗の手製で、照準グラスと連動している。実は愛用のリボルバー式マグナムもあるが、希紗の前では使いたがらない。

冷静で寡黙、他人の感情に鈍く、時に冷酷でもある。プライドが高く、遼平の挑発にのることもしばしば。慎重で、人間不信な面もあるが、根は生真面目で頑固。人間に興味無し。遼平とは犬猿の仲。

安藤 希紗… 19歳

茶髪、ポニーテール。瞳はやや茶色。裏警備会社LK中野区支部の社員であり、（自称）天才メカニックであり、紅一点。

巡回などより監視室での監視、警備員の装備品の制作、監視システム  
の改良などが主な仕事。非戦闘員。

明るく常に元気で、遊び心の塊。どんな状況でも空気で突き進む、  
支部のムードメーカー的存在。過去のトラウマにより、拳銃を恐れている。  
実は、少女っぽく繊細な一面も。

「裏警備会社 Lose Keeper」

『裏社会』……近未来日本の、犯罪が絶えない無法地帯。そんな  
社会に、《守護》を仕事とする変テコで一流な警備会社、それが『  
ロスキーパー』。

これは、影を背負いながらも《守護業》を貫く、おかしな人間達の  
物語。。。

PL『迷い子と空』の者

依頼3 《朝露の菖蒲》アサツユノアヤメ

PL『迷い子と空』の者

「ううん、どうしよう……」

重たいリュックを背負いながら、白銀の髪をした少年は道端で困って立ち止まっていた。

この辺りは廃ビルばかりで、少年は一刻も早く帰りたかった……。のだが。初めて来た場所で、彼は迷子になっていたのだ。駅どころか、交番の一つも先程から見当たらない。

「どうしよう、このままじゃ怒られちゃうよ……誰かこの辺に詳しい人に道訊かないと……」

といっても、まだ昼なのに錆びれたビル街ばかりでほとんど人など見当たらない。仕方なく、少年は近くの細い路地に入っていくことにした。

彼の経験上、大体こういった場所には危ない人間が居たりするものなのだが、もはやそんな事は言ってもらえない。誰かマトモそうな人を探して道を探ねようというのだ。

「あ！」

少年は早速、数人で固まって何やら話している若者達を見つけた。何故か全員、青いリストバンドを手首にはめている。最近の流行なのだろうか？

「あのー、すみません。ちょっと道を訊きたいんですけど……」  
「ああ？　なんか言ったかこのチビ？」

ガラの悪そうな男が振り返り、背の低い少年を見下ろす。白いTシャツに青のジャケットを着た、大きなリュックを背負っている少年は、じつと大きなライトブルーの瞳で男を見上げていた。

「僕、駅までの道を教えてほしいんです。知りませんか？」

「はあ！？　……おい、聞いたかよ、このチビ迷子だぜ？　ははははっ！」

その男の言葉で仲間の若者達も笑いだす。しかし少年は気を悪くしたような表情一つせず、嘲笑が終わるのを黙って待っていた。

「……それで、教えてもらえますか？」

やっと静まつてきた笑いに合わせて少年はもう一度尋ねる。その顔には子供っぽい純真さしかない。

「ばーか。誰がご丁寧にガキ相手に道を教えてやるってんだよ。てめえにはココの常識を教えてやるぜ」

にやつきながら若者達が少年を囲む。参加しない者も後ろで楽しみに今後の成り行きを見ていた。少年はただ不思議そうに、前に立つ男を見上げる。

「その『常識』に道案内って含まれてます？」

「なワケねーだろチビ！　全部いたたくつつつてんだよ！！」

少年の両腕を脇の二人が掴み、地面から引き上げた。少年の細い足がフラフラと宙に浮く。持ち上げた瞬間、両脇の男達はズシツときた意外な重さに驚いたが口にはしなかった。

「あれ？　……もしかして僕、今追い剥ぎに合ったりします？？」

「ははっ、マジではかなチビだぜ！　少し待ってな、すぐてめえの短かった人生が終わるからよお！！」

「それは……嫌だな」

ぶら下がり状態の少年の鳩尾目掛け、正面の男から拳がねじ込む

ように向かった。

が、何故かその拳は虚空を貫いただけ。一瞬で……まるで消えてしまったかのように、少年の姿は両脇にいた男達の間から無くなっていたのだ。

微かな一陣の風が流れる。手品を見せられたように顔が驚愕で一色の若者達の背後で、ストーン、と軽く何かが落ちてきた音。直後に金属同士が掠りあったような音も聞こえた。

焦って若者達は振り返る。信じられないことに、その場には確かにあの両腕を掴まれていた少年の姿があった。コキコキと音を鳴らしながら、肩を押さえて腕を回している。

「教えていただけなのなら、いいです。それじゃあ僕はこれで」  
そう言っただけでペコリと頭を下げ、少年は背を向けて帰ろうとしているのではないか。肩すかしと驚きのダブルパンチをくらいつつも、若者達はまだ諦めていなかった。久しぶりの獲物だ、収穫がなければココでは生き抜いていけない。

「ふざけるなよチビがあ！ぶつ殺してやるっ」  
若者達……全員で十人ほどだろうか、少年へと拳を振り上げて跳びかかっていく。少年は気づいていないのか振り向きさえしなかった。

「やっぱりこういう展開になっちゃうんだなあ……」

ため息混じりの、少年の小さな呟き。それと同時に瞬時に振り返る。白銀の髪がキラキラと光った。

「バカが！」

獲物を目の前に興奮して襲ってきた男の拳をくぐり、腕を掴んで一瞬で地面に叩きつける！アスファルトの地にホコリが舞い、男は地にのびる。

しかし少年の力に一度は驚いたが、もう若者達は退かなかった。ここは裏社会だ、何があってもおかしくはない社会。少しぐらい力の強い子供がいたって不思議ではないのだ。

少年は一人の男を昏倒させて、哀しそうにその男を見下ろしているだけだった。彼は知っているのだ、この《追い剥ぎ》という行為の結果が若者達の生死を少なからず左右させている事を。しかしここで捕まって、殺されるわけにもいかない。少年は……おつかいの途中だったからだ。そんな少年が出した結論は。

再び背を向け、猛烈な速さで少年は走り去った。「あっ！」と若者達が声を上げる。まさか、ここまでやって逃げるとは……。

「待ちやがれーっ！」

「うそ〜！？ お願いだから追い駆けてこないでよー！」

哀願するような少年の声が路地に響く。地の利が若者達にあるので、行き止まりに入ってしまったら追いつかれてしまう。そうしたら……。

(ああ、やっぱり裏路地なんかに入るんじゃなかったあ……)

後悔が少年を襲うが、今更どうしようもない。重たいリュックの肩紐が肩に喰い込んでくる。なんとか逃げ切れる事を祈りながら、少年は知らない路地を時折曲がって走り続けた。

ところが、あるうことか少年は石に躓いて転んでしまった。砂が目に入ってしまった、痛んで前が見えない。アスファルトから、若者達が追いついてくる音が聞こえる。もう逃げられない。

「やっぱり子供だな、転んでやがる！ 観念しろっ」

脚が空気を切る音が聞こえ、反射的に少年は転がって蹴りの一撃を避けた。まだ視界は霞んでいる。

「いてて……仕方ないよ、ね」

少年は擦りむいた膝で立ち上がり、目をこすりながらビル壁に手を当てた。そんなに高くない廃ビルだ……高さは八メートルほどだ

るうか？ 少年はすつと息を吸い込む。

風が突如吹き荒れ、少年を隠した。先程吹いた風と同じだ、渦巻くような旋風。そしてその風が止んだ時、少年の姿は壁際になかった。

「なっ！？ ドコ行きやがったっ？」

「おい、あそこだ！」

派手な金髪の若者が上空を指差す。その場にいた全員が上を見上げると、なんと廃ビルの屋上に先程の少年が片腕でぶら下がっていた。跳んだにしては異常な脚力だ。

「待てこのチビ！ 俺達『スカイ』をなめんなよーっ！」

「えー、もうカンベンしてよぉー」

片目を開けてなんとか少年は屋上に上がり込む。いくらなんでもココまでは上がってこないだろうと、少年はホッと一息吐いた……のだが。

金属が重みで軋む音が下から響いてくる。どうやら非常階段を数人が上ってきているようだ。

「早く逃げなきゃ……！！」

まだ少し痛む目をこすり、少年は立ち上がる。ここで戦うには狭すぎた。

少年は、戦闘手段を持っていないわけではない。いや、むしろその外見からでは想像もつかないほどの戦闘力をその身に宿している。しかしそれ故に、少年は戦闘による若者達の怪我を心配して逃げているのだ。ましてや屋上で戦えば、地上へ落下の恐れもある。それを避ける為、少年は再び走り出す。

ビル間の段差をものともせず、なるべく表へ出れるようにビルに  
跳び移っていく。

「待て　　！！！」

おぼつかない足元だが、よっころよっころ若者達がビルを移って  
追ってくる。ここまでくると立派な執念深さだ。

「待ちたくないよ　　！」

半泣きでビルを軽々と跳んでいく少年。少年が跳ぶたびに風が少  
年の身体を包んでいるように見えた。

「え？」

少年の視界が突如、ガクツと下がる。一瞬ふわつと身体が軽くな  
り、その後いきなり下方へ重力に引っ張られる感覚……！！？

「うわああああ　　！？！」

踏み外したビルの角から、少年　　純也はまっさかさまに落ち  
ていった……。

## 第一章『花言葉』(1)

### 第一章『花言葉』

「遅いなア……純也のやつ」

あくびを噛み殺しながら、『裏警備会社ロスキーパー中野区支部部長』という、長つたらしい割にはたいして権威の無い職務の霧辺真は、退屈そうに窓を眺めていた。

「ほんとよね、もしかしたら迷子になっちゃってたりして。ちょっと遼平、お茶淹れてよ」

今まで顔を上げずに機械を組み合わせていた安藤希紗が、三十分ぶりに顔を上げて手を止めた。

「ああ？ 何で俺が茶なんか淹れなきゃならねーんだよ、飲みたきや自分で淹れる」

接待用のソファの上で寝ていた紺髪の子……蒼波遼平が面倒臭そうに首だけ上げて答える。投げ出された長い脚がソファからはみ出ている。

「だって純くんをおつかいに行かせたのは遼平じゃない。普段なら純くんがお茶淹れてくれるのにい」

「うっせえな、だったらあいつが帰ってきてから淹れさせりゃいいだろうが！」

「やだやだ、今喉渴いたの！」

「じゃあ水でも飲んでろっ。ったく、アイツがおせーのが悪いんじやねえか」

「ってゆーか、いつの間にか何故か純也がお茶汲み係になってるんやね……」

苦笑しながら、真は今ここにいない白銀髪の最若正社員を想う。

別にこの会社に上下関係も先輩後輩もほとんど存在しないが、純気は気が優しく料理が上手いためにそういった役回りに暗黙の内になつてしまつたのだ。不運といえれば不運なのだが、本人がそれを悲観している様子は全く無い。……むしろ、少し楽しんでるように見えるくらいだ。彼にとつては、この事務所に全員で居ることが楽しいらしい。それでは仕事にならないのに、ただそれが嬉しくてたまらないようなのだ。本当に理解できない発想だと、真は他人事でそう想う。

（何故なら、）真は部長の立場で考える。

自分の言う事を聞いたためしの無い部下達。

事務所、仕事場変わらずケンカの絶えないメンバー。

一応警備会社なのにマトモな依頼の来ない支部。

しかも部下達は一癖も二癖も三癖もありまくる個性豊か過ぎな人間ばかり……一体、ドコに行つたらこんな人材ばかり揃つてしまうのか。真はこの会社の社長の七大不思議の一つだと決め付けていた。

この会社に、雇用制約は存在しない。というか、一応は面接があるのだが、その面接が普通ではないのだ。無法社会であるここ『裏社会』でだつて珍しすぎる採用方法が、ロスキーパーには存在する。それは、直に社長と面接、もしくは社長直々のスカウト……なんて事。しかも雇用確率はほぼ百パーセント！……なのにこの裏警備会社が社員で溢れることがないのは、裏社会でのロスキーパーの評判がすこぶる変、だからだ。

「やだ〜！ やだやだやだやだやだあ〜っ！ ……だいたい、いくら《渋谷》に自分が行きたくないからって、」

「……わあつたよ、茶あ淹れさせていただきませよっ」

手をバタバタさせて子供のように催促し始めた希紗に……いや、《渋谷》という言葉を出した希紗に、とうとう遼平が降参した。普

段なら狸寝入りでもするところなのだろうが、珍しく純也をおつかいに行かせた責任を感じているらしい。

「あ、じゃあワイの分もよろしくな」

「くそーっ、こうなったら俺様の激茶を飲みやがれー!! 言つとくがキザ野郎には淹れねえからなっ!」

ポットの前で遼平は振り返り、先程から気配を消したように黙々と作業していた淡緑色の短髪の男をビシツと指す。その視線にやつと黙っていた男は顔を上げずに口を開いた。

「元よりいらん」

「けっ、後で後悔しても知らねーかなっ!」

「茶一つで後悔する程俺は貴様のようにひもじくはない……! というより、貴様の茶など飲んだが最後、どうなるかわからんからな」

紫牙澆斗の鋭い眼光と言葉が返ってくる。遼平は腹が立って地団駄を踏み、今にも澆斗に飛び掛かろうと殺気を放っていた。澆斗がずっと手元で磨いていたリボルバー式マグナム銃が鈍く光る。

「どういう意味だよ、ああ!？」

「言ったとおりの意味しか含んでいない。それとも、今の言葉がその頭では理解不能だったか？」

「てめえのそーい態度がム力つくんだよ! 人をバカみてえに見下しやがって!」

「少なくとも貴様は『馬鹿』であっていると思うが？」

「こっのヤローっ!」

軽い、手を叩く音。

「はいはい、そこまでやで。ったく、ケンカだけなら売るほどあるんやね……」

保父のように手を叩きながら、真が二人の視線の間に入ってきた。呆れた表情で遼平をポットへ押しやり、澆斗の磨いていた拳銃を取り上げる。もちろん、死人を出さないためだ。

「ちっ」

「わかったから返せ」

マグナムの撃鉄が今日はまだ起きていない事を確認し、真は丁寧に銃を返す。ここでもし放り投げて返したりしたが最後、澪斗の放つ冷気に耐えられなくなる。哀しいが、真は部下の殺気に耐えられるほど頑丈ではなかった。

「はア、ココは幼稚園やないんやけどなア……」

「何か言ったか？」

珍しく、遼平と澪斗の声が重なる。

「……なーんも」

お手上げだと言わんばかりに、腕をヒラヒラと振って自分のデスクに戻る部長。席に着いて、真はある事を思い出していた。

そういえば、自然とこんな役目は純也に回っていた。純也がココに来る二年程前までは、二人のケンカを制止するのは部長である真の役目だったのだ。しかし純也が来てからというもの、自分は純也の優しさに甘えていた気がする。お茶淹れ係兼ケンカ制止役……考えてみれば純也が一番の働き者なのかもしれない。

（今度給料の割合を上げてやろうかなア）と、部長は本気でなんとなく窓を眺めながら考えていた。

## 第一章『花言葉』(2)

「ちょっとアンタ、そんな所で寝てないでよ」

「う、うん……?」

ゆつくりと視界に光が戻ってくる。最初に見たのは、清々しい青空と……幼い少女の苛立った表情。純也は仰向けになっていた身体を起こす。

「そんなトコに転がっていたら商売のジヤマなのっ。どっから降ってきた天使か知らないけど、早く起きてよねっ!」

「……ゴメンね、でも僕は寝てたワケでもましてや天使でもないんだけど?」

「うっ……なんでもいいからそこをどきなさいっ!」

自分より大きな箒を持った少女は、半分箒に振られながら、精一杯箒を振り回している。

純也は、自分よりも背の低いその少女をじっと観察していた。とても幼い……歳は六、七歳ではないだろうか。手が隠れるほどの大き過ぎるぶかぶかな白いシャツに、赤いスカート姿。一目で古着とわかる服装だが、何か商売をしているのだろうか?

そこまで考えて、純也はやっと今自分が何処にいるのか理解できた。大きな道路に面した、小さな花屋の前。どうやら落ちたビルの下に、たまたまこの花屋があったらしい。

「お花屋さん……? 君、ここのお花屋さんの子なの?」

「アタシはここのお手伝い! なんかアンタに『君』って呼ばれるのはムカつくっ!」

「う、ごめん……。えっと、じゃあお名前は？」

「……………教えてあげないよーだっ！」

「あ、あはははは……………」

二回りほども幼い少女に散々に言われ、純也は返す言葉を失くしてしまふ。どうやら自分は相当邪魔者らしい。

「どうしました、何かあったんですか？」

花屋の奥から、優しげな女性の声がし、ほぼ同時にバンダナとエプロンをした綺麗な女性が店から出てきた。

「あつ、お姉ちゃん聞いてよー！ コイツが空から降ってきたのー！」

「いや、だから僕は落ちただけで……………」

二人の言い分を同時に聞きながら、若い女性店員は笑顔で二人を店内に招き入れた。純也はじつと笑顔の店員を見上げる。バンダナで抑えきれないサラサラとした桃色の長髪が、胸のところまで降りてきている。顔立ちは非常に整っていて、誰が見ても美人だと言うだろう。大人の女性の美しさを備えながら、同時に少女のような純潔さを宿す表情。その優しそうな眼差しには一片の汚れも見えない。女性店員に魅入っていたそんな純也の膝に、少女が一発蹴りをいれた。

「あいたっ」

「なにお姉ちゃんに勝手に見とれてんのよ！ これだからオトコは嫌い！」

「い、いや別にそーいうワケじゃ……………」

「駄目でしょう、いきなり人に乱暴を振っては。謝ってください」

「何でお姉ちゃん、だつてコイツが〜！」

「コイツなんて言っちゃ駄目。失礼ですよ。……………すみません、この子がいきなり失礼したみたいで」

少女の頭を撫で、女性店員はゆっくりと純也に深くお辞儀をする。

「いいんです、僕がお店の邪魔をしてしまったようなので。もう失礼しますから……」

手を振って自分の非を謝り、純也は店を出て行くこととする。そんな純也を、店員は引き留めた。

「待ってください、膝、擦り切れてますよ」

「あ、さっきの……」

先程若者達に追いかけられた時転び、その時に右膝を軽く切ってしまったっていた。薄らとまだ出血している。

「これは……違うんです。ちょっとさっき、若い人たちに追いかけられちゃって、それで」

「若い人、ですか？」

「ええ、なんだかみんなココにリストバンドした人たちで……」

そう言っただけは手首を指差す。その言葉に二人はひどく驚いた表情をした。

「ちょっとアンタ……それって『スカイ』じゃないの？」

「スカイ？ ああ、そういうえばそんな事言っただかも」

「よくご無事でしたね、こちらへどうぞ、簡単な手当ぐらいなら出来ますから」

言っただけで女性店員は自分のバンダナをほどいて純也の傷口に巻いてくれた。ふわっと桃色の美しい髪が垂れる。

「ありがとうございます……、あの、スカイって何なんですか？」

「『スカイ』は……この周辺を支配している若者のグループです。

裏路地は彼らの縄張りなんですよ」

「そうなんですか……」

裏社会で『グループ』と言えば、『裏路地に住み込んでいる、帰る場所の無い者達の集団』のことだ。ほとんどは若者で、窃盗や恐喝などをして日々を暮らす人々。リーダーとなる人間を中心として、縄張りを広げるために隣接するグループと日々闘争を繰り返す。

どうやらこの渋谷を縄張りとしているのが、その『スカイ』とい

う名のグループらしい。

「アタシも『スカイ』のメンバーなんだから！ 『スカイ』は東京最強なのよっ！」

「え、君も？」

「違うでしょ、あなたはスカイじゃないの。危ないからそんな事言つては駄目よ」

「もー、お姉ちゃんはダメダメばかりなんだから！」

頬を膨らませて少女は店の奥へ走って行ってしまった。その後姿を純也は見送る。

「本当にすみません、あの子はちょっと気が強くて……」

「いいんですよ、なんだか遼にそっくりだし」

「……リヨウ？」

「僕の同僚です。蒼波遼平っていうんですよ、だから遼」

「……………」

「お姉さん？」

「あ、すみません。変わったお名前だったので」

「確かに変な苗字ですよね」

一瞬考え込むような表情だった店員に、純也は笑顔で答える。やっぱり『蒼波』なんて珍しい氏名だろう。ほとんど絶えた一族の末裔らしいし。

「先程同僚とおっしゃいましたが……あなたは何かお仕事をなさってるんですか？」

「はい、僕見えないと思うんですけど、一応警備員なんです。……」

「やっぱり見えませんか？」

じつと驚いたように純也を直視してくる店員に、苦笑しながら純也は問う。見た目は中学生程度な純也だ、見えないと思われても当然だと自覚していた。

「ええ……大変ですね」

「でも、そんなに忙しい職場でもないんですよ。今日だってヒマだ

「たからお使いを頼まれちゃったわけですし」

「やっぱり、遼平さんに？」

「そうなんですよ、自分で来ればいいのに、バイクの部品を買ってこいって。まったくあの歳でワガママなんだから」

先程からガチャガチャと金属音を放っている重たそうなりユツクの中には、バイクの部品が詰め込まれているらしい。重たそうに純也は腰を上げた。

「僕、もうそろそろ帰らないと遼に怒られちゃうんで帰りますね。」

「店の邪魔をしてみませんでした」

「いえ、この店はいつも暇なので構わないですよ。そうだ、お礼にお花を差し上げますね」

「え、いいんですか？」

ゆっくりと渡された斑点の浮かぶ白い花束に、純也は驚いて訊く。こくつと笑顔のまま店員は頷いた。

「あ、それとこれも 遼平さんに」

小さな花弁が集まった濃い桃色の花も渡され、純也はそのいい香りに一瞬引き込まれそうになる。

「白いのが『百合水仙』で、桃色の花が『花蘇芳』です。大切にしてくださいね」

「ありがとうございます、それじゃ！」

笑顔でお辞儀をして、純也は走り去っていく。西の空の端は既に赤く染まってきた。

「どうか、お元気で……」

女性店員がその後姿をずっと見送っていたのを、彼女以外に誰が知るだろう。

## 第一章『花言葉』(3)

「ただいまあゝ！」

「あ、純くんお帰り〜」

元気にドアを開けて帰ってきた純也を、希紗が何故か嬉しそうに迎える。大きな花束を抱えた純也を、全員がそれぞれの表情で見ている。空を切つて、突然何が純也に物凄い勢いで襲い掛かってくる！

避けられるけど、でも避けられないいつもの一撃。

「いたっ」

振り下ろされる拳は、本気になればかわせるモノ。それでも、何か悪いコトしちゃったのかな？とか思っている刹那に少年の頭にヒットするのだ。

「……人におつかい頼んどいてそれはないんじゃないかなあ？」

「うるせえ」

純也を殴つてすぐに背を向けた遼平を、不満そうに見上げる。なにやら不機嫌そうだ。

「気にせんでエエよ純也。遼平は自分で淹れた茶で吐いただけやから」

「えっ？ 遼がお茶淹れたの！？」

「あのお茶は凄かったわよ〜、だって変色してたもん」

「一体何をどう入れたらあのような異臭を放つようになるのだろうか」

それぞれがああ筆舌に尽くし難い《激茶》の感想を述べる。やっぱり遼平に茶を淹れさせたのが間違いだっただの。

「遼……どうしてまた」

「俺が聞きてえよ……」

遼平も後悔しているらしく、がっくりと肩を落とした。自分で淹れて、誰も手をつけなかったので一気飲みしたら壮絶な味がしたのだ、もう思い出したくもない……。

「ところで純くん、その花なに？」

「ああ、これはね、もらったんだ。花屋のお姉さんに」

「なんだ、アルストロメリアと………花蘇芳じゃねーか」

「『アルストロメリア』？ おかしいなあ、お姉さんは確か……」

小難しそうな長いカタカナを口にした遼平に、純也は驚きながらも首を捻る。花の名前が、女性店員と聞いたモノと違う。

「ああ、『百合水仙』とでも聞いたか？ 別名なんだよ」

「遼平知ってるん？ 花なんて全然似合わへんのに」

「一言余計だ。俺はなあ、博学なんだよ」

ふんつ、と遼平はデスクに脚をかけて姿勢悪く座り込んだ。純也は遼平の言葉以前に、彼が『博学』なんて言葉を知っていた事に感心していた。

「それでね、こっちの花は遼に、だって。桃色の髪の毛、綺麗な人だったよ」

「俺に？ ……花蘇芳を？」

「うん。一緒にココに飾っておくね」

何か嫌悪そうな遼平の様子には気づかず、純也は小さな花瓶に水を入れてくる。

「珍しい事もあるものだな、貴様が花に詳しいとは」

「ふふん、ついでに花言葉も知ってるぜ。アルストロメリアは『幸い』だ」

「……もはや珍しいを通り越して鳥肌が立つのだが」

得意気な遼平に、澪斗が顔を引きつらせる。もちろん、あまりのミスマッチさに、だ。

ふと、真のデスク上の外部連絡用通信端末がいきなり着信音を発した。いつもはこれで依頼人などと交渉をとったりしている。「何やる……依頼やといいんやけどなア。ポチっとな、と」

画面が表示される、微かな機械音。

「……………」

受信ボタンを押した真が止まる。なんだか嫌な予感が全員を包む。

「……………こりゃ、ある意味仕事、やな……………」

「どうした？」

「ん〜なんつーか、これは……………」

頭を抱えてデスクに肘をつく真の姿に、四人が真のデスク上の端末前に集まる。そこには通信メールで、こうあった。

『拝啓

明日、資産家山瀬氏の宝物をいただきに参上します。ロスキーパー  
―中野区支部の皆様、もし私を阻止できる自信がお有りの方は明日  
深夜、お会いしましょう。

敬具 怪盗・アイリス』

「なんだこりゃ？」

「挑戦状、か」

「アイリスって聞いたことあるわ、たしかスゴ腕の怪盗よ」

「どうして僕達にこんなモノを……………」

「わからん。が、見逃すわけにはいかへんなア……………よし」

そう言っつて真は端末のキーボードを打ち込み始める。通信をどこかにかけるようだ。何度か呼び出し音を鳴らし、やがて通信が繋がる。

『はい、こちら裏警備会社ロスキーパー本社受付でございます。本

日はどちらへ御用ですか？」

「中野区支部代表、霧辺真や。至急情報部の《道化師》へ繋いでほしい」

『了解しました、少々お待ちください』

受付嬢が頭を下げ、画面が保留になる。ロスキーパー各支部には、本社に連絡をとり、その各部署を利用できる権限がある。今回真が呼び出した『情報部』とは、裏社会のあらゆる情報をロスキーパー専属の情報屋が集めて管理している部署であり、その情報は社員に提供される。

「おい真、アイツに頼る気か？」

「しゃーないやろ、背に腹は変えられん」

「久しぶりだね、元気にしてるかなあ」

少しの沈黙は、すぐに破天荒に破られる。

『はーい、みんなおひさッ！ 僕になんかご用かなッ？ 今なら特別キャンペーン中で、殉職の葬儀屋までバッチリ紹介しちゃうぞッ』

「んなキャンペーンいらへんって。変わらんア、フォックス」

フォックス……通称《道化師》。ロスキーパー情報部の中でも最も幅広い情報網を持つ情報屋。おかしなテンションの持ち主だがその情報の信憑性は確か。情報屋の常識だが、常に顔は隠してある。

情報屋とは、最も命を狙われやすい職業だからだ。今日もピエロのような仮面をしていて、変声機を使用。本名や素性は誰も知らない。

『やつほ、野郎共はどーでもいいんだけどさ、希紗ちゃんはッ？』

「ここにいろわよ」

「相変わらず貴様の眼中には女しかないのか？」

画面に映るように二人も顔を覗かせてくる。画面は五人でぎゅうぎゅうになり、真は既に画面下デスクに押しつぶされる形となって

いた。

『……で、この僕を呼び出すなんてどうしたのさッ？』

「ああ、せやつた。あんさんに調べてほしい事がある、怪盗アイリスについてや」

『怪盗アイリス？ あはは、それなら今更調べなくても調査済みさッ。読むよ、』

女性怪盗アイリス 三年前から現れた一流の女性怪盗。姿を見た者はほとんどなく、数少ない目撃者によれば、仮面をしていて顔は見えないが女性である事はいつも着物姿なのでわかっている。犯行の手口は基本的だが全く無駄がなく、かえってそれが犯人像を掴みにくくさせている。戦闘を避けるため、武器所有の情報は無し。……ってトコだね。本社も何度かアイリスには手を焼いててね、情報だけは売るほど有るってワケさッ。君たちは初めてだっけ？  
どしたの予告状でも来た??』

「ってゆーか、わざわざご丁寧に挑戦状が来はったんや」

『へえ、初めてだな、そんな例。うんメモメモッ。ま、とにかく相手するなら気を抜かない事だね。君たちでも裏をかける可能性は充分だからさッ』

「わかった。それと、ついでやけど資産家の山瀬って人の事もわかるか？」

『山瀬？ ちょっとお待ちを………お、あつたよんッ。』

山瀬重蔵。表では株で成り上がった資産家となっているが、裏社会に片足を突っ込んでいる人物で、裏金で大きくなった。美術品のコレクションを持っているという情報がある。金持ちにありがちな非常に疑い深い性格。

……だつてさ。家はかなりの豪邸だね、これまでロスキーパーと接触を図ったことは無いよッ』

「そうか……ありがとな」

『いゝえいえツ！ その代わりと言っちゃアレだけどさく、希紗ちゃん、今度一緒にお茶でもどう？』

「遠慮しとく！」

ピエロが希紗だけに手を振った途端、画像が真っ黒に。

真がやつと顔を上げると、希紗が勢いよく回線コードを引っこ抜いていた。女子には甘いフォックスの性分は皆よく知っている。

「モテますなア、希紗も」

「それ嫌味？」

ギロツと睨まれて、真は肩をすくめる。恋愛というものはなかなか思うとおりにならないらしい。

「アイリス……『菖蒲』、か。それでどうするのだ、全員で行くのか？」

「あゝ、ワイ明日からちよつと用事あんねんけど……」

「私も。でも五人で行くしかないかしら」

「いや、その必要はねえよ」

低い声でそう言い放った遼平を、全員が意外そうに見る。今まで珍しく黙っていた遼平が、切れた端末の画面を見つめながら何気なさそうに呟いていた。

「俺が行ってくる。ンな怪盗なんて、俺一人で充分だぜ」

「遼平が自分から言い出すなんて珍しいやんか。明日はブリザードかもなア」

「何が狙いだ？」

「やだ、遼平のトコってばそんなにお金に困ってんの？」

「遼、今日は熱でもあるんじゃない？」

「……俺ってそんなに信頼薄いのか？」

今更な質問に、全員が息をそろえてコクンと頷く。遼平はため息

を吐いてがつくりとうな垂れた。そんな、全員一致で肯定しなくても……。

「俺に考えがあるんだよ。どうせお前ら用事があんだろ？ だったら俺が行つてくる」

「遼平にも『考える』能力つてあつたんやねえ。まア依頼とちやうし、行きたいつてゆーならワイは止めへんけど」

「だったら僕も行く。遼ただだと不安だし……」

遼平の『考え』に不安を抱いていた純也が手を上げて名乗り出る。何か嫌な予感がしたから。だいたい、怠け者の遼平が自分から仕事に行くと言い出すなんて、大抵金銭が底をついた時なのだ。だが、今月はまだ経済的に余裕がある……同居し、家計を管理している純也はその事を一番よく知っていた。

「なら二人で行つたつてや。今回は依頼されたわけやないから信用されへんかもしれんが、その辺は自分達でなんとかするんやで」

「うん、わかつたよ」

「……」

真の許可の声が聞こえていないのか、遼平はじつと純也が飾った花を眺めていた。その瞳がいつになく鋭いことには誰も気づかない。

「じゃあ僕これから山瀬さんに連絡をとってみるね」

「ああ……」

どこか上の空な遼平の返事に違和感を持つことなく、純也は真に入れ替わって椅子に座り、端末を操作し始めた。先程フォックスに送ってもらった山瀬氏のデータから通信アドレスをコピー、送信する。遼平は真のデスクに行儀悪く腰かけたまま、花瓶を見つめ続けていた。

「……ところで蒼波、花蘇芳の花言葉は何なんだ？」

「あ？」

「裏切り、だ」

## 第一章『花言葉』(4)

『てめえ、よくも……俺達を裏切りやがったな!!』

『もう少して俺達の《居場所》が完成したのに……なのにお前は!』

『最低よ! あんたは最低の人間よ!! ……いいえ、もう《人間》  
《なんかじゃない、やっぱり《鬼》なのよっ!』

『そうやって俺達につけいって、最初から仲間になる気なんて無かつたんだろ! あの人の恩も忘れて……』

《鬼》め、死ぬ。殺す。消える。失せる。苦しめ。お前など、最初から存在しなければ。

……ああ、好きなだけ言ってくれ。俺は全てを聞き取れるから。お前らに反論できる権利なんて、俺にはねえよ。

やっぱり俺には愛される価値なんか無かつたんだ。お袋の言ったとおり、俺は害しか成さない存在だったんだ。

……お前らは俺を恨めばいい。あいつらは俺を憎めばいい。《俺》を……そくだ、お前らの敵は《俺》だ。《俺》でいいんだ。

俺は血を愛する者。俺は死をもたらず者。俺は破壊を求める者。  
俺は 裏切り者。

『命令だ、蒼波遼平を殺せ!!』

『遼平……俺はお前を裏切るよ。だから、お前は 』

『壊してやるよ……てめえら全員俺が壊すっ！ 苦しみ、泣き、鮮  
血を噴いてここで……っ、死ねえええ!!!!』

俺の手が、脚が、声が、人間を破壊していく。

これでいいんだろ？ これが、俺のあるべき姿なんだろ？ 俺は、

もう誰も求めてはイケナイんだろ  
？

……なのに。

「うあああああああっっ!!」

俺の目の前で、俺のせいで、苦しみで発狂しそうになる小さな身体。

やめろ、やめてくれ、そいつは俺とは関係無い!!

そのチビは                   !!!!

「うああああああああっっ!!」

突如の悲鳴、跳ね上がる鼓動。何事かと飛び起きて、遼平は周囲を見回す。

ここは遼平のアパート、彼が寝ていたのはリビングのソファ、そして同じ部屋のキッチンにいるのは。

「純也!? おい、どうした!?!」

今の悲鳴も、その倒れる姿も、あの時と同じで。それが遼平を焦らせる。何があった?

「……っ、痛い……」

「ドコが痛いんだっ? どうしたんだよ!?!」

尋常ではない純也の苦しそうな顔に、いつになく遼平は動揺していた。きつと、あんな夢を見た直後だからだろう。

「わかんない……けど、頭がすごく痛い……」

「頭……！？ おい、耳は痛くないか？」

「え、あ……うん、耳も痛いみたい……」

『頭が痛い』という言葉に何かに気づいてしまった遼平は、夕オ  
ルを濡らして純也に渡す。それを額に当てておくように指示して、  
もう休むように言った。

「ごめん、まだ夕ご飯の準備が……」

「……今日はいい、もう寝ろ。明日は仕事だからな」

相当謎の頭痛で疲労したらしく、純也はソファに倒れるとすぐに  
寝息をたてた。純也の旺盛な食欲が失せるほどの、疲労で。

「……………許してくれ、純也……………」

それは過去への謝罪か、無意識に発してしまった危険な《音》を  
詫びているのか。

それとも 己が存在してしまうことに対してか。

「あんたが俺を呼んでいるのか……？ あんたが俺にあんな夢を見  
させたのか？ ……やっぱり俺には、許しを請う資格すら無いのか  
？ 俺が生まれてしまった罪の、許しを……」

暗闇しか映さない窓、そこから空を仰いで遼平は呟く。決して人  
には見せない、弱りきった眼で。

男の問いに答えが返ることは、なかった。

闇守護業 3 《紫花》

## 第二章『宿命の邂逅』(1)

### 第二章『宿命の邂逅』

「えっと……ですから、僕達に護らせてほしいんですけど……」  
少しおどおどして純也は話を続ける。目の前には、葉巻を吸って踏ん返り返っている初老の恐そうな男が。

「ふん、誰がそんな話を信じる？ どうせお前らが勝手に偽造した予告状だろう、とつとと帰れ！」

「そんな……」

一向に信用してもらえない気配のない山瀬氏に、純也はたじろぐ。

そもそも警備会社に直接予告状が届くなど本来なら有り得ない事なのだ、信頼してもらえなくても仕方ないことだと思う。普通は予告状を送られた所持者に警備員が依頼されるものだ。

そんな気まずい空気が流れ始めた時、今まで口を開かなかった遼平が一步前に出た。

「なら何事もなかったら報酬はいらねえ。俺達を今夜ここに置いてくれるだけでいい」

「……本当か？ それでは仕事にならんだろう？」

「どうせ俺達に来た予告状だ、あんたに信じられなくても別に構わねえよ。ただな、それであんたの宝とやらが盗まれても俺達に責任はねえぜ？」

「む……わかった、お前らに今夜警備を任せてやる。ただし、もしそれで本当に盗まれたら責任を取ってもらうぞ」

「えっ」

「承知した。これで交渉成立、だな」

にやっと遼平の口元が引き上がる。純也はいつもと違う遼平に少し驚きつつ、交渉が成立した事に安堵していた。

「それじゃ、俺達は夜まで仮眠させてもらうぜ。夜の警備は一切任せとくれ」

言い残して背を向けて部屋を出ようとすする遼平に、純也は山瀬氏に一礼して焦って続いた。

一面真っ白な世界。

音も光もなんにも無い、ただただ真っ白な世界。

怖いくらいに静寂が辺りを支配し、白い闇に包まれる。

「……………」

口を開いても、声にならない。誰か呼びたいのに、何かを言いたいのに、何も口から出てこない。うつ伏せになった身体から感覚が消えていく。自分の魂が身体から抜けていくような気分にもう諦めさえ感じていた。

そんな時だった。

「おい、んな所に寝てんじゃねーよ。邪魔だろが」

「……………」

なんとか余力で顔を上げる。眩しい、光で逆光になった大きなシルエット。眩しい青い光、けれどそこに立っているのは蒼い闇。

その人の印象は、《青》だった。

後ろ襟首を掴まれ、いとも簡単に身体が引き上げられる。まるで小動物が拾われるみたいに。

「なんだ、生きてんじゃねえか。てっきり死んでんのかと思ったぜ」

面倒臭そうな表情でその人は言った。こちらは顔を変える力も残っておらず、ただ無表情でその人を見上げた。やっぱり逆光でよく見えなかったが……それでもあの瞳は今でも焼きついたように覚えている。深い、漆黒の瞳……。

「だ……れ……?」

僕は、振り絞るような声で言った。

「い、おい、起きろよ純也。時間だぞ」

「うう……ん? ……あ、おはよー遼」

「おはようじゃねえよ、今何時だと思ってるんだ? 早く仕事に行くぞ」

小さな部屋で純也は目を覚ます。窓の外はすっかり暗くなっていった。どうやら仮眠の時間は終わったらしい、起き上がって大きく伸びをする。

「はあー、よく寝た。……なんだか昔の夢を見てた気がするなあ?」

「昔の夢? そんなことより今は仕事だろ、行くぞ」

「あ、うん」

いつになく仕事意欲がある遼平を追い、純也は部屋を出る。何故だろう、見慣れているはずのその背中に、今日は何か違う雰囲気を感じた。

「あのさ、遼……」

「なんだよ」

「どうしたの? なんだかいつもと違うみたいだけど……今回の仕

事、何か訳が有るんじゃない？」

「……別に」

「そんなコトないんじゃない？ だって依頼人さんとの交渉だっていつもなら絶対に引き受けないような内容だったしさ」

何事も無かつたら報酬は無い、しかも失敗したら責任を取らせられるなんて…… 遼平じゃなくても普通は断る依頼内容だろう。それをあっさり引き受けた遼平に、何か考えがあるとしたか思えない。

「……心当たりがあんだよ」

「え？」

「純也、お前は……いや、何でもない」

「一体どうしたのさ？ なんか遼変だよ」

「……」

遼平はもう言葉を返さない。ただ前を見つめて歩くだけだった。

その顔は、純也の声など届いていないようにも見える。そんな様子に、純也は肩をすくめてついて行く。

「ここだな」

重い扉を押し開け、二人は宝物庫に入る。宝物庫といってもコレクショナルームのような所で、ガラスのショウケースの中にそれぞれの美術品が飾ってある。二階であるここでは、大きな窓ガラスから月光が差し込んでいた。

「メールには深夜ってあったっけ。それまで待つてようか」

「……ああ」

窓ガラスを仰ぎ見たままやっぱり上の空な遼平に、純也は諦めてガラスケースを背にして座り込む。どうやら気にしても自分にはどうしようもないらしい。

それから、何事も無く二時間が経過した。月は傾き、影が伸びる。

「……………!!」

微かな音に二人の警備員は即座に反応する。窓ガラスの先に細長い影が存在していた。ガラスが綺麗に等身大の円形に切れて、落ちる。

「……………予告状を受け取ってくださったのですね、安心しました」

「お前がアイリスか？」

音も無く部屋に舞い降りてきた影に、遼平が問う。鋭い瞳が細められた。

「はい、私がメールを送ったアイリスです。やはり……………あなたなので、ね、遼平」

「あんなのか……………」

「え……………遼……………?」

厳しく、だが哀しそうにも見える表情で遼平はゆっくりと歩き出す。そして、アイリスから三メートル程間を開けた場所で立ち止まった。

「ねえどういう事? 遼は……………この人と知り合いなの?」

「俺は、アイリスの正体を知っている……………いや、今知ったんだ。アイリス……………あんたの狙いはハナっからココの宝なんかじゃなかったんだな?」

「その通りです。私の目的は復讐……………ずっとあなたを探していました、今日こそあの日の復讐を果たします!」

「そうか……………」

遼平の顔に笑みが走る。軽く自嘲気味なその笑みに、純也は何故か鳥肌が立つのを感じた。

アイリスが陰になっていた部分から歩み寄り、その姿が月光の下にさらされた。白い仮面をつけながら、その姿は動きにくそうな淡い紫の着物姿。

ゆつくりと、怪盗は仮面に手をあててその顔を隠していたモノを取り去る。その仕草は優雅、としか言いようのないもので、純也は息を呑む。

「っ！ そんなっ、お姉さん!？」

ふわっと放たれた桃色の鮮やかな髪。アイリスは、きつとした表情で遼平だけを見ている。

……昨日純也が会ったばかりの花屋の女性店員が、そこには確かに居た。

## 第二章『宿命の邂逅』（2）

「あなたが警備会社にいることをその子から聞きました。花を贈って鎌をかけてみましたが……本当に出てくるとは。正直驚きましたよ、まさか裏切り者が警備員なんてやっているなんて」

「似合わねえことは百も承知だよ。……あんたこそ、怪盗なんてやるガラじゃねーだろ」

「ちよつと待つてよっ！これってどういう事なの！？なんで……どうしてお姉さんがこんな所にいるのさっ!？」

大きく腕を振り、純也は一步踏み出す。混乱する……何なんだ、この状況は……っ！

「そうですね……あなたも巻き込んでしまったのですから、幾つかお話しなければなりませんね」

「やめる、こいつは関係無いっ」

「自分の裏切り行為が仲間知られるのが怖いのですか？いつまでもその本性を隠し通せるとでも？」

「時雨、あんた……!」

歯を食い縛る遼平に、時雨しぐれと呼ばれた怪盗が睨み返す。純也は一体二人が何を話しているのか理解できなくて、行動できない。

「昔、東京のある一帯を管理下に置いた若者のグループがありました……」

時雨が瞳を閉じ、ゆっくりと語りだす。

「そのグループにはリーダーの下に三人の幹部を持っており、その下に数百人の人間をつれていました。グループは混沌とした東京の裏社会に秩序を取り戻す事を目標とし、帰る場所無き人間を救い、

上位の四人はその為に日々活動していました。しかしある日、幹部だった一人の人間が同じく幹部だった男を殺害し、グループを裏切ったのです。……そう、あなたの隣りにいるその男こそが、私達『スカイ』を裏切った犯人なんですよ」

「な……っ！」

「結果的にあなたを利用する事になってしまったのは謝ります。ですが、その男の側にいるのは危険です。あなたも裏切られたくなかつたら早く離れることをお勧めします」

「そんな……違う！ 何かの間違いだよっ！」

今度はじつと自分を見つめてきた時雨に、純也は抗うように叫ぶ。そんな事は有り得ないと信じていた。遼平は目を細めたまま黙っている。

「……しかし、あなたが信じなくても私には関係ありません。私は、彼の復讐を果たすだけ。《邪鬼の権化》、蒼波遼平！ 裏切り者よ、覚悟なさい！！」

金属の接続音がして、時雨の手には薙刀が握られていた。その先についている金の刃は三日月状。優雅に、薙刀を構えると。

一直線に男の喉もとを狙う三日月、女性とは思えない渾身の一撃！

三日月の刃が空を切る音に、遼平は全く避ける気配は無い。それを受け止めた風の音が部屋に響いた。

遼平に薙ぎられた刃を、手前で純也が受け止めていた。薙刀の力に対抗するだけの風が刃を中心に吹き荒れる。しばらく力が拮抗し合い、バックステップで時雨が一度身を引く。

「どうしても、邪魔をするのですね？」

「やめてください……あなたとは戦いたくない！」

「ならばそこを退いてください！」

「それはできないよ……遼を殺させたりはしないっ!!」  
「あなたは知らないのです! その男は《鬼》なのですよ!? 自分の名声の為に仲間を裏切る卑怯者なんですっ!」  
「違う……違うよ! 遼はそんな事しない!!」

懇願するような純也の叫び。この人とは戦いたくない。でも遼平を殺すというのならそれは阻止しなくてはいけない。たとえ……そうだ、たとえこの人と生死を争う事になっても、それだけは。

「それならば仕方ありません……、まずはあなたを倒します!」  
「くっ!」

ギリギリで襲い掛かる薙刀の刃を避け、純也は後ろへ跳び退く。次々とくる太刀を純也は回避し続ける。こういった武器は間合いに入らなければ被害は無い。

「あ。おい純也、言い忘れてたんだが……」

「えっ、なに!？」

やっと口を開いた遼平の言葉に、純也は一瞬気がそれる。薙刀がスツと引かれた。

「その薙刀、分かれるぞ」

煌めく黄金の月っ!!

「うわあっ」

中央部分から分かれた薙刀が、間合いを突き出て純也の首元を逸れる! 瞬時に首を引っ込めた純也はよろけて尻餅をついた。

「遼っ! そーゆー事は早く言ってよ!」

「油断すんなよ、時雨はスカイの幹部だからな」

「だったら遼も避けてよっ、どうして動かないのさ!？」

「そこで高見の見物ですか。あなたにとっては仲間などどうでもい

い存在ですからね」

「……」

また黙り込む遼平。まるで何かを待っているように、決して動くとはしなくて。

なんとか体勢を立て直し、純也は後方へ宙返りして先程より広く間合いをとる。もう薙刀は元通りに繋がれていた。時雨は距離をとられたまま、動かない。

「ですが、ここまでです。もう、あなた達は動けない」

「えっ……?」

その言葉が合図であったように、純也の身体がぐらっと揺らぐ。そのまま身体のバランスがとれなくなり、倒れこむ。何故か、身体に力が入らない。

後ろで遼平も膝をつく音が聞こえた、同じような状況らしい。そこで純也はやつと微かな葉の香りに気づいた。こんな初歩的な手にひっかかるなんて。

「く、う……」

「無駄です、これを三分でも嗅げば動けませんよ。トリカブト……  
魔女の毒草です」

身体を起こそうと必死になっている純也を見下ろす時雨の手に、紫色の花をつけた茎があった。

「ご覚悟を……」

振り上がる鋭利な月は、残酷に光って少年の首もとへ落ちた。

## 第二章『宿命の邂逅』(3)

「ちっ、純也ああっ！」

「え……っ？」

いきなりの遼平のしゃがんだままの蹴りで、純也は横に突き飛ばされる。その方向にあった窓を割り、純也は一階の地面へ落ちていった。

「うわあああー……！」

純也の声が下へ遠ざかっていく。蹴り飛ばした反動で、遼平は完全に体勢を崩して立てなくなった。

「……換気の為に仲間のあの子を犠牲にしたのですか？ やはり《鬼》ですね、あなたを幹部にしたのは間違いでした。もう無駄です、今更部屋に穴を開けたところで毒は抜けない……また、あなたは仲間を裏切った」

「なんとでも言え。時雨、あんたの狙いは俺一人だったはずだ。あいつに手を出す必要は無かっただろうが」

「私の目的は復讐だと言ったはずです。それを阻止しようとする者がいるならば、その者も同罪。やっつと、あの人の復讐が果たせる……」

「変わったんだな、時雨……」

「全てはあなたのせいです。あの日から、全てが狂ってしまった……スカイも、リーダーも、そして私も……もう戻れないくらいに。若者達は乱れ、グループは弱まって。ずっとあなたを探していた、

あの人の無念を晴らす為に、この三年間私はずっとこの好機を待っていました。あの時一体何があったのか……死ぬ前に、全てを話してください」

「俺が……俺があいつを殺した。ただそれだけだ。理由なんてねえよ」

「何故ですっ！ 何故あの人死ななければならなかったのか、話しなさい！」

時雨の語気が荒くなる。遼平は目を伏せたまま淡々と感情を込めずに言葉を続けた。

「……話す事なんてねえよ。早く復讐とやらをやればいいだろ？」  
「……そうですね、あなたはそういう人……。それでは我が復讐、果たさせてもらいます！！」

いつもと同じ、軽い笑みを浮かべて遼平は前倒れに崩れた。視界が段々ぼんやりと消えていく。

「……っ、ばさ……」

微かな、誰にも聞きとれない眩きを最後に遼平は意識を失った。毒が身体を蝕んでいく。

無音で時雨の薙刀が振り上げられる。遼平の首目掛け、刃が下ろされる瞬間。

一瞬、何か強力な気が室外から放たれたようだった。その刹那だけ、女の腕が止まる。

いきなり重い扉が押し開けられ、物凄い暴風が部屋に流れ込んでくる。その激しさに時雨は瞬時に腕を前に掲げた。着物の袖が、激しくはためく。

「はあ、はあ、はあ……。よかった、間に合った……。かな？」

扉の先に、切り傷だらけの白銀の髪の少年の姿が見える。少年は自分の傷にも気づかない様子で倒れた男に駆け寄った。

「遼！？　しつかりして！」

「この風……！？　もしかしてあなたが？」

「時雨さん、ごめんなさい……。今日は帰ってもらいます！」

遼平の脈をとっていた純也が立ち上がり、時雨に向って右腕を振るう！　見えない拳を喰らったように時雨は後方へ吹き飛ばされた。「きやあっ」

「お願い……。早く逃げて！」

悲しそうな表情で、それでも純也はもう一度腕を振る。猛烈な旋風が部屋を駆け抜け、部屋中の毒気ごと吹き飛ばしていった。

「……必ず……。っ、必ずこの復讐は果たしますっ！」

そう言い残して怪盗の影は砕けた窓ガラスから消えていった。それを確認し、風は除除に治まっていく。

急いで振り返り、純也は遼平の顔色を見る。青白くなっていて、もう生気を感じられない。脈は僅かに有るが……。段々と弱くなっていくのが確認できた。

「遼っ、……起きてよ遼！ 遼 つ！！」

少年の呼ぶ悲痛な声が、宝物庫に木霊する。

### 第三章『事実と追憶』(1)

倒れこむ男達の中に、俺は一人立っていた。

「はっ、弱すぎて相手にもなんねーぜ」

近くに寝転んでいる男一人を軽く足で除け、下敷きになっていた重いアタツシユケースを持ち上げる。今日の収穫だ。

「……相変わらずだね、遼平は」

「なんだよ翼、いつからいたんだよ？」

どこからともなくたくましい身体つきの若い男が現れる。白鷹翼しらたか つばさ

……俺のライバル兼仲間ってやつだ。

「そうだねえ、遼平が『おらおらもつと本気で来いやー！』って叫んでいたトコロあたりからかな」

「……お前、たまに楽しんで俺のコト見てねえか？」

「そんなことないよ」

その高い身長により見上げる俺に向かって、楽しそうな笑みで翼は肩をすくめた。絶対コイツは高見の見物してやがったな。

「ほらよ、今日の収穫だ」

俺はアタツシユケースを翼に放り投げる。軽々と受け取り、翼は俺を真剣な顔つきで直視してきた。

「いつも悪い」

「……いーんだよ、んな言葉聞き飽きたぜ。俺にはこんな事しかできねえんだからな……てめえには他にやる事が山ほどあんだろ？」

「それでも、遼平には感謝しているよ。お前だけこんな役目に回らせて……俺が代わってもいいのに……」

「バカ言え、てめえまで汚れ役になる必要なんてねーんだよ。だいたい……そんな事したら悲しむヤツがいるだろ」

「遼平……ほんと、ごめん」

「うつせーよ」

ふいつと顔を背け、俺は歩きだす。もう陽が暮れかかっていた。俺達のグループを保つための資金調達は、俺の……俺だけの仕事。暴力団やらマフィアやらにケンカをふっかけて、金をいただく。しかしそれを知っている人間は少なく、俺は『好きで他人を傷つけている』という設定になっている。グループのヤツらが、奪った金銭で生きているのだと知ったら、あいつらは飯を食わなくなるかもしれないから。……揃いも揃って、甘すぎるんだよ、このグループは。

……まあ、そんなトコロ、俺は悪く思わないけどな。

「遼平、血のりぐらいは拭いていこうよ」

「あ？ 面倒くせーな……」

服の袖で顔を擦ったら、余計紅色が広がってしまった。もう面倒なので放って置くことにする。

歩き慣れた渋谷の裏路地を行き、ドラム缶が大きく積まれた広場へ。そこで、もう一人の俺達の幹部が待っていた。

「あ、お帰りなさい、二人とも」

「おう」

「時雨、今日も何事も無かった？」

いつもどおり優しげな笑みで俺達を迎えた綺麗な女……流華時雨りゅうか しぐれに翼は今日のグループ、『スカイ』について問う。

「はい、今日も何も。最近は近隣のグループも大人しくなってますね、いい事です」

につこりと微笑みかける時雨。荒廃した裏社会に咲く、一輪の花みたいだ……。

「あら、遼平、顔が……」

「え……ああ、なんでもねーよ」

「そんなことはないでしょう、血がついてますよ」

「あ……っ」

そつと、時雨が俺の顔をハンカチで拭いてくる。近づいた桃色の髪から甘い花の匂いがした。俺の顔が、違う意味で赤くなる。

「や、やめるよ。俺ガキじゃないんだぞっ」

「あら？ 十六歳っていつたらまだ子供でしよう？」

「違えよっ！ ちくしよー、俺をいつまでも子供扱いすんなよな！」

「そつだよ時雨。あんまり遼平をいじめてやると、かわいそつだよ」

「翼まで言うかーっ！」

俺は腹が立つて地団駄を踏んだ。ちくしょう、みんな揃って俺をガキ扱いしやがってっ。

「うふふふ……。そろそろリーダーのもとへ行かなければ、あの方が心配してしまつわ。行きましよう」

「そつだね」

「くっそー、なんかムカつく〜」

やっぱり気は治まらなかつたが、歩き出した時雨と翼を追って俺も早足で進む。リーダーのアイツに、今日の収穫を渡さないといけない。

そして俺達三人は、夕日の中影を伸ばしながら歩いていった。

こいつらの隣りが俺の居場所だと、信じて……………いたかった。

### 第三章『事実と追憶』(2)

「くっ、う……」

闇から意識が引き戻される軽い浮遊感と、それに伴う頭痛。ゆっくりと瞼を開けるが、何故かチラチラとする。

「遼！ よかった……気がついたんだね」

「……純、也……？」

安堵の表情の純也が遼平の視界に入ってくる。その目元には薄らと涙さえ浮かんでいるように見えた。

「よかった……ほんとによかったよ。遼ってば目を覚まさないんだもん、心配したんだよ？」

「俺は……どうなったんだ？ そうだ、時雨は！？」

がばつと身を起こした途端、激しい頭痛が遼平を襲う。その痛みにも身悶えた身体を純也が支えた。

「ぐう……っ」

「ダメだよ遼、まだ寝てないと。応急処置はしたけどまだ毒が身体に残ってるんだから……」

また寝かされ、遼平は顔だけ動かして周囲を窺う。さっき休んだ仮眠室だ、自分が寝かされているのはソファらしい。まだハッキリとしない視界で、遼平はぼんやりと純也を見る。純也は身体の所々に絆創膏や包帯を巻いていた。

「純也無事か？ 一体何があったんだ？」

「僕の方はなんとか……。びっくりしたよ、いきなり蹴り飛ばすんだもん」

「お前、毒は？」

「うん、僕はあんまり吸わなかったから平気。ありがとね」

「……俺のせいだ、礼を言われる筋合いはねえよ。それで、時雨は

「？」

「あの後なんとか着地して、急いで二階まで駆け上がったさ。それで部屋に到着した時にはもう遼の意識は無かったんだけど……とりあえず逃げてもらったよ。僕、時雨さんとは戦いたくなかったし……」

「……………」

「あのさ、遼、遼は……………」

一瞬気まぎれになったその時、ドアノブが回る声、誰かが入ってくる足音。遼平には視界が完全に治らなくて誰だかわからなかった。

「なんだ、蒼波は目が覚めたのか」

「紫牙か？ お前、どうしてココに……………」

「純也に呼ばれた。貴様が倒れて警備ができない、とな」

「純也？」

「ご、ごめん……。でも、僕は遼の手当てがあったから……………ごめん。純也が申し訳無さそうに俯く。遼平が澪斗とは仲が悪いのは知っていたから、澪斗に頼むのはなるべくなら避けるべきだったのだ。

だが、それよりただ遼平が心配で……………彼は警備に当たれるような状況ではなかった。

「謝るな、俺が悪かった。だが……………なんでよりもよって紫牙なんだ？」

「よりもよって、とは何だ。希紗は機械部品の裏オークションに行っていて不在。真は『新婚旅行』で当分帰ってこん」

「まあ……………そういうコトなんだよ遼」

「希紗はともかく真のヤロー、もう何回『新婚旅行』やってんだよ！？」

「今回で十七回目、だな」

「もう『新婚』じゃねーだろ……………」

なんだか強くなってきたように思える頭痛に、遼平は瞼を閉じた。駄目だ、まだ当分動けそうにない……。

「とにかく今のところは異常無しだ。もう警備は必要無いと思うが、俺はもう一度見回ってくる」

「ありがと溇君」

「紫牙」

「何だ」

「……悪い」

「気色悪いぞ、毒を吸って頭がおかしくなったんじゃないのか？」

「……そうかもな……」

一度自嘲気味にニヤついて、遼平はまた意識が闇に引き込まれるのを感じた。

遼平がまた眠りについたので確認して、純也の顔に再び不安そうな色が宿る。もう二度とその目を開いてくれないのではないかと……そんなことは有り得ないはずなのに、心が不安定に揺れる。

「案ずるな純也、蒼波はそう易々と死ぬるような人間ではない」  
まるで純也の考えを全て見通しているような溇斗の言葉。おそらく、誰が見てもわかるほどに今、少年は怯えた表情をしているのだろう。

「ねえ溇君……遼は仲間を裏切って殺すような人じゃ……ない、よ

ね……？」

澪斗に背を向けて、純也は遼平の脈をとる。その言葉は勝手に震えていた。澪斗は窓から冷たい蒼い月を眺めて、語り出す。

「……数年前、ケルベロス……《冥府の門番》と呼ばれた男がいた。東京裏社会で最強にして最高と謳われた男がな。しかし覇者とていつかは倒される、『最強』の称号を求めぬ者に。だがケルベロスを倒した者に与えられた称号は、『最低最悪の裏切り者』だった。……ケルベロスが最も信頼を寄せていた仲間だったからな」

「それって、遼の……っ？」

「裏切りなど、裏社会では珍しい事ではない。……ただ、ケルベロスのいたグループは東京裏社会の浮浪者達を救い、完全な平安を与える一歩手前まで……突如として中枢の重要な人間を失った。そして裏社会はまた暴力と混沌に満ちた世界に墮ちる……ケルベロスを希望としていた者は絶望した。俺が知っている情報は、そんなトコロだ」

普段無口な澪斗にしては珍しく長く語った後、彼は一息吐く。そして混乱の顔をしているであろう純也へ。

「所詮、裏社会に平和など有り得ない。他人を蹴落とし合うのが、この社会の《定め》だ。蒼波がどれだけ人間を殺めたか知らんが、殺し屋をしていた俺には言及する権利は無いからな」

それは澪斗なりの考えで、遼平への姿勢なのか。フォローするよううでいて、冷たく遼平の裏切りを肯定して。

……そうして沈黙する純也を残し、澪斗は再び警備に去っていった。

「僕は……僕は遼を信じるよ……？　ねえ遼………遼は、人に絶望を与えるようなコトしないよね？」

肩を震わせて男の手を握る少年は、ただひたすらに望み、祈り、信じていた。

### 第三章『事実と追憶』(3)

「先生、こんにちは」

ふらついている遼平に肩を貸しながら、純也は古くて薄い鉄製の扉を押す。その先には、不精ひげを生やし、伸びた後ろ髪を下で結わえた三十代ぐらいの男がデスクに向って座っていた。

「ん？ …… よお、遼平と純也じゃないか。どうした、また怪我したのか？」

けだるそうに頭を掻きながら、白衣を着た闇医者は振り向いた。

こんな地下の一室でサングラスをかけている、裏社会でも有名な万能医師、えんざいししひこ炎在獅子彦だ。たった一人で手術まで行える熟練外科医だが、先天的な特殊能力《読心術》によって精神科もこなす。ただ要求される治療費も裏らしく並みの額ではないが。

「……てめえは訊くまでもねーだろうが」

「ほお、毒にやられたのか。そんなに心配しなくていいぞ純也、ここまで来れるようならそんなに重くないだろう」

「先生、お願いします」

闇医者に目を合わせ、少年は頭を下げる。獅子彦は相手の瞳を見るだけで心を読む《読心術》を無意識に使用することができるため、わざわざ口で聞かずとも、本意を知る事が可能なわけだ。

「トリカブトにやられただと？ 今時そんなの使うヤツがいたんだなあ」

「お前なあ、《読む》んだったらもう少し気を使えねえのかよ」

「ははっ、そりゃ悪かったな。まあこっちは俺にかかれれば楽勝ってコトで安心しな。……ところで純也、最近身体の調子はどうだ？

発作は起らないか？」

「うん、この頃は平気だよ。でもそろそろ薬がきれるから、もらっていいのかな」

「そりやまいど。隣りの薬剤室に例の薬があるからもってきな」  
「はい」

遼平を固いベッドに座らせ、純也は隣りの部屋へ入っていった。純也はとある持病のために、定期的に獅子彦から特殊な薬を購入しなければならぬ。

純也が扉を閉めたのを確認し、「さてと……」と獅子彦は遼平に向き直る。

「時雨だな？」

「読まなくてもわかるのか？」

わざと視線を合わせないようにしていた遼平がやっと顔を上げる。そこでサングラス越しの獅子彦の目とかち合った。

「当然。危険性の高いトリカブトを扱える人間は少ないんだよ、裏薬剤師でもな。それにトリカブトといったら時雨の十八番だぜ？ どうしてひっかかった？」

「……別に。ただ油断してただけだ」

「『もとから知ってた』って顔してるな」

「《読む》なよ」

「読んでないさ、本当にお前そんな顔してるんだよ。それじゃあ純也にもバレちまうぜ？」

「……」

不機嫌そうに黙ってしまった遼平に、獅子彦が苦笑を漏らす。遼平の表情は、憂いを帯びているようで、子供がすねたよう。

「本当にお前は裏表無いな。俺は好きだぜ、そういうの」

「けっ、野郎に好かれたって嬉しかねえよ。早く治せや」

「つたく、あんまり反抗的な態度とると注射しちゃうぞ」

「ガキじゃあるまいし、ンなので怖がらねーよっ！」

「おや〜？ 心が少し動揺してるようだけど〜？」

「くそっ、だからお前にかかるのは嫌だったんだ！ 治せねーんだ

「つたら他あたるぞ！」

怒って遼平は立ち上がるつとすが、どうにも力が入らなくてよろけた。そんな遼平をベッドに押し返し、獅子彦は重い一冊のファイルを取り出す。これが今まで遼平が獅子彦にかかってきたカルテだ。

「はいはい、病人は大人しくしてろつての。俺が一発で毒なんか抜いてやるからよ」

「今回はいくらなんだ？」

必ず治す換わりに、獅子彦の治療費はいつも高額だ。実はツケにしてある分もけっこう有る。

「いらぬいさ、今回は。黙秘している俺にも、責任の一端があるからな」

「……勘違いするなよ、これは全て俺の事だ。お前にも……純也にも関係無い」

獅子彦が真っ直ぐ見つめてくるが、遼平は険しい視線を逸らさなかつた。心も言葉と全く同じ事を示している。

「そうやって全部一人で背負い込むんだな、お前は」

「……俺は何もできてねえよ、今も……昔もな」

「時雨には何も言わなかつたのか？ 純也のやつ、相当心が乱れていたが」

「そうか……」

「全てを話したらどうだ？ なんなら俺が……」

「俺が翼を殺した！ ……それは紛れも無く事実だつ」

古い扉が開く音、そして少年が息を呑む音も、蒼波の人間に聞き取れた。

隣室から紙袋を抱いた純也が現れる。その表情は驚きと哀しみに支配されて。

「遼……」

「純也つ、聞こえたのか？」

「ごめんなさい先生、少しだけ。遼……遼は本当に……!?」

「純也落ち着け、それは……」

明らかに激しく動揺し始めた純也の心を治めようと腰を上げた獅子彦の前に、腕が出される。俯いたまま、少年に一切表情を見せないで、紺髪で顔を隠した男は。

「ああ、時雨の言うとおりだ。俺が、昔の仲間だった男を殺した。時雨の大切な人間だった男をな」

「そんな……ウソ、だよな？ 嘘って言うてよ！ なんで、なんで!?」

「……本当だ。理由は、ねえよ。ただ、アイツとはいつか殺し合う定めだったんだ。俺が『最強』になるために」

「なんでそんなコト言うの……っ？ 僕、そんなの嫌だよっ!!」

薬の紙袋を持ったまま、純也は診察室から走り去ってしまった。重く冷えた沈黙、獅子彦は純也の出て行った扉を見つめ、遼平は俯いたまま。

「……何故ああ言ったんだ？ 純也が殺しを嫌うことは充分知っていたはずだろう？」

責めるようで、それでも遼平の考えに少しだけ心当たりのある獅子彦は、振り向いて尋ねた。

「これが事実だ。……それに、アイツはもう俺の側にいない方がいい……」

「お前の身元がスカイに知れた以上、か？」

「それもあるが……元々アイツは俺の近くにいるべきじゃなかったんだ。俺達は、あまりに違いすぎる……」

「それを純也が望むと思うのか？」

「望む望まないの問題じゃねーよ。俺は人殺しだ……元々アイツの近くにはいられなかったんだ……これでいい」

ずっと俯いたまま、表情の見えない遼平。その声色は、哀愁のような、安堵のような、複雑な音。

「遼平……何考えてんだ？」

「はっ、お前にもわかんねえってか？ 笑えるな」

「何を、考えているんだ？」

全く笑みの無い真剣な表情で獅子彦がもう一度問う。睨みつけるような視線に、遼平は気圧される風もない。

「純也を頼む」

「は？」

「アイツには医学の知識も有る。お前のお荷物にはならないはずだ、ココで養ってくれ」

「……ご、こんにちは……」

「あー！ アンタまた来たのーっ!？」

「わ……、ご、ごめんね。でも時雨さんに用があつたものだから……」

自分よりも頭二個分程小さい少女にまたも怒鳴られ、少年は怯む。純也は一昨日にも来た小さな花屋の前にいた。よく見れば小さな看板に、店名で『月花』と書いてある。

「お姉ちゃんにっ？ なんでアンタがお姉ちゃんに用があるのよ!？」

「それは、その……あ、この間もらった花の代金を払いに来たんだよ」

「ホントにっ？」

「ほんと、ほんと。だから、会わせてもらえないかな？」

今適当に思い浮かんだ理由で、純也は少女に作った笑顔で言う。結構演技は苦手だった。

「またどうしたの、大きな声で………あら？」

「「あ……」」

やっぱり店の奥から出てきた若い女性店員……時雨が純也を見てはたと止まる。純也も勢いで来てしまったものの初めに何と言ったらよいか考えておらず、少し気まずい空気が流れた。

「なに？ なになに？ なによ二人ともどーしたの?? かたまっちやっつてさ」

「あ……そうね。純也さん、とりあえず中へどうぞ」

「は、はい……お邪魔します」

中のカウンターに腰を下ろすが、どうにもぎこちない感じは変わらなかった。お互い俯いて、相手の一言を待っている。

「お姉ちゃんどうしたの？」

「なんでもないのよ、あなたは外の花に水をやってきてくれる？」

「うん、わかった！」

少女はすんなり頷いて嬉しそうにジョウ口を持って駆けていく。

「……あの、あなたはお変わりないですか？」

「はい……僕は。ありがとうございます」

攻撃を仕掛けられた相手に「ありがとうございます」「はないと思うが、純也はペコツと頭を下げる。

「昨日は……その……すみませんでした。あなたまで巻き込んでしまつつもりはなかったのですが……つい、熱くなってしまいました……」

「い、いえ……僕の方こそ手を出してしまつて……ケガとかしてませんか？」

「私はなんともありません。ご心配をおかけしましたね」

「よかつた……それならいいんです」

緊張した面持ちだった純也の顔に、優しい笑みが戻る。それにつられたように時雨も微笑んだ。

「えと……、僕どうしても時雨さんに訊きたい事があって……それで来たんです」

「遼平の事……ですね？」

「はい。僕、わからないんです……何を信じていいのか……何を自分信じたいのか。だから、時雨さんの口から話してもらえませんか？」

「見たところ、あなたは随分と遼平を信頼しているようですね。……いいのですか、事実を知っても？」

「………お願いします」

決心した顔で、純也は時雨を見つめる。時雨は一呼吸置いてゆっくり語り出した。

その、彼女が知る限りの凄惨で非情な《事実》を。

### 第三章『事実と追憶』(4)

「……私達『スカイ』は、行き場の無い者達が集ったグループでした。殺伐とした裏社会の中で救いを求め、自ら自分達の《居場所》を作ろうとしたのです。そんな志の下に集まった四人の中でリーダーを決め、私達は理想の社会を形成していこうとしました。ところが、三年前のある日突然にグループに崩壊の危機が訪れるのです。ある男の裏切りによって。幹部の中で中枢を担っていた白鷹翼が、何者かによって無残に殺されていました……それ以来、遼平が姿を消したのです」

そこまで話して、時雨の拳がぎゅっと握られる。その顔は昨日の事を思い出すように歪んでいた。

「でもっ、それだけで遼平が犯人なんて！」

「もちろん、私達もいきなり遼平を疑いはしませんでした。仲間だったのですから。しかし、現場には決定的な証拠が。大勢の武装した人間の屍の中に、何故か翼の死体はありました。その殺害のされ方が、何よりの証拠だったのです」

「え……？」

「『死の旋律』。仲間さえ恐れられた、蒼波一族の禁術歌です。私も一度遼平から説明を聞いただけです。人間の頭蓋骨の大きさと丁度波長の合う音波を流し、共鳴振動を起こすという技だそうです。それを受けた相手は、脳が振動して頭蓋骨にぶつけられ、激痛の後に脳死するのだとか。……翼には、その技がかけられた証、額に大きな内出血の跡がありました。周りで死んでいた人間達の死因は様々でしたが、明らかに武器は使われておらず、加害者は体術を

使用していたものと断定できました。遼平があそこにいた人間全てを殺害した証拠です」

「死の……旋律？」

純也は初めて聞く単語に身震いがした。確かに、超音波を発する能力を持つ遼平ならば医学的に可能な事だ。だが、そんな技を遼平が使用したのを見た覚えは無い。いや、遼平が純也の前で人を殺した事など一回も無かった。

(いや……、まさか一昨日のアレは……?)

一昨日に純也を襲った突如の頭痛。あの時遼平は、「耳は痛くないか」と訊いてきた……あの原因が、遼平の発した《音》だとしたら？

確かに、『死の旋律』は存在する……！

「遼平はそれ以前にも、マフィアを相手に一人で全滅させた事も何度か有り、これほどの人間を殺すのも何の不思議も無いことでした。信じていたのは私達だけ……翼は遼平のことを深く信頼していたのに……！」

時雨は唇を強く噛み締め、瞳を強く閉じて俯いた。今でも目を閉じれば焼きついている……愛する人間の無残な死骸。

「時雨さん……すみません」

自分が辛い過去を思い出さしてしまった責任を感じ、純也は悲しそうに謝る。

「あなたには何の責任も無いことです、謝らないでください。しかし、私の知る事実はお話しました。それでも、あなたはあの男を信じるのですか？」

「僕は……」

純也は足元を見つめて言葉を区切る。そこで、改めて気づくのだ。何を言われようと、どう知らされようと、迷いの後でも、結論は

同じトコロ。

「僕は、遼を信じたい。それしか出来ないから……」

忘れられないのだろう、あの時の深い漆黒の瞳。果てしない孤独と暗い運命を辿る事全てを、受け止めた瞳。何もかも諦めたような、哀しい瞳……。

「私が遼平を憎む理由はお話しました。もしよろしければ、あなたがそこまで遼平を信頼する理由を教えてくださいませんか」

「僕は……死にかけていたところを遼に拾われました。遼は命の恩人なんです。僕に居場所を、仕事を、楽しい思い出を、そして命をくれた大切な人なんです。だから、僕は遼を信じたい。みんなが遼を犯人だと言ってても、僕だけは最後まで信じたいんだ……！」

ただ拾ってくれたからだけではない。今まで一緒に過ごしてきた日々の中で、遼平の性格はよく知っている。単純で喧嘩っ早くて不器用だけど、本当は優しく素直じゃないだけで。強がってるけど、たまに誰よりも寂しそうな顔して。まるで……そう、純也なんかよりよっぽど『迷子』みたいな感じで。

やはり遼平は純也の知らない多くの暗い過去を背負っていて。しかもそれらは今もなお彼を苦しめ続けているのだと。気づいていたのに……時折、あの漆黒の瞳で夜の闇をじっと何かを探すように見つめていたから。その横顔は、泣きたそうなのに涙を流せない、不器用な迷い子の顔だったから。

ずっと、何かを求めているのだ。絶対に手に入らないことを、わかってるのに。

「お姉ちゃん、終わったよ!」

軽くなったジヨウ口を手に、少女が帰ってくる。褒めてほしそうな表情で二人の前までやってくる様子は、小動物のようで。

「ありがとう。それじゃあ今度は店の中の花をお願いしていいかしら?」

「もっちろん!」

さも嬉しそうに少女はもう一度水を汲みにいく。時雨は微笑ましくそれを見送っていた。

「えっと、あの子は妹さんですか?」

「いえ、違います。あの子は幼い頃にこの辺りに捨てられていたんです、だから名前も無くて……私の所で自分からお手伝いしてくれているんですよ」

「偉い、ですね」

「ええ……きつと物凄く寂しいだろうに、そんな素振りにはちっとも見せないんですよ。まだあんなに幼いのに……」

「あの、僕も……僕も今日ここをお手伝いしてもいいですか?」

「え? ……ええ、もちろん」

少し驚いた顔をしたが、時雨はあっさりと承諾して綺麗な笑顔で純也に小さな鉢植えを渡した。

まだこの『時雨』という人物について知りたかった……口にしたものの、未だに遼平のもとに帰れなかったから。少年は名も無き少

女と花屋を手伝う。

そんな純也を見る時雨の眼に、優しさと慈愛と……何故か切なさ  
が宿っていた。

### 第三章『事実と追憶』(5)

風も北風になつてきた夕暮れ。  
何故か、アイツとの思い出はいつも陽が暮れる時だった。

「ねえ、遼平は夢とかつてある？」

「は？ なんだよいきなりまた……」

唐突の翼の問いに、俺は訊き返した。

「いや、遼平は何の為にスカイにいるのかと思ってさ」

「てめえで俺を誘つといてよく言っぜ。俺は……そうだな、夢なんかねえよ」

「無いの？ 一つも？」

「……ああ」

僅かに驚いた表情で翼は俺を見てくる。なんだかムカついて俺は視線を逸らした。

『夢』なんて、物心ついた頃から持ったことなど無かった。そんなモン、持っただけ重荷。何の希望にもなりはしない。だいたい、やりたい事など無いんだ……ただ生きてるのだから面倒臭いのに。

「そっか……じゃあ俺の夢にかけてみない？」

「あ？ お前の夢？ なんだよ、ソレって」

興味があつて俺は訊いた。俺が持つてねえモンを持つてるのが、実は羨ましかったのかもしれない。

「スカイに孤児院を作るんだ。俺達で」

「孤児院？ お前本気かよ？」

いままで空を見上げていた翼が、今度は俺を真っ直ぐ見つめてくる。瞳は何より真剣さを語っていた。

「もちろん本気だよ。今の状況が一段落して裏社会に秩序が出来たら……俺は孤児院をスカイに作りたい」

「……そういやお前、親いねえんだよな」

「まあね。俺もこの裏路地で育った人間だからさ、一人で生きる辛さは充分知っている。だから……もう『生きる』のに苦労させたくないんだ、これからの子供達には」

「……………」

「馬鹿らしい、かな」

おどけた顔だが、瞳は俺をじつと見据えてくる。よほど強い夢なのだろう。俺は、翼の静かな熱い意志に正直驚いていた。そうか、『夢』ってのは……そーいうモンなのか。

「……いいんじゃないの、別に。ただそれは相当金がかかるんだろ？」

「あ、ああ……まあそれだけは仕方無いよね」

「かけてやるよ」

「え？」

「お前のその夢、悪くねえじゃん。資金集めは俺に任せるよ」

「遼平……いいの？」

「てめえから言ってきたんだろうが。俺夢って持ったことねーからよくわかんねえけどよ、面白そうじゃねえか」

壁にもたれながら、俺はいつもの軽い笑みを浮かべた。『夢』か

……まあ他人の夢だが、やってみるのも退屈しないかもな。

「じゃ、約束だね」

翼は笑って手を上げた。俺も手を上げて軽く打つ。手と手が打つ感覚に、何故か俺は心地良さを感じていた。

「それはそうと翼、お前ソレをリーダーに言ったのか？」

「あ……しまった、まだ言っていなかった」

「……お前なあ……」

俺は変なところで抜けてる翼に、頭を抱える。俺より六つも年上のその男は、平和そうに笑っていた。

「ホレ、とつとと起きろー！」

思いつきり布団のシーツごと引つ張られ、遼平はホコリかぶった床に朝から投げ出される。

「いつてえ〜！ 獅子彦っ、てめえ病人相手にナニしやがんだよ！？」

「病人〜？ そんなのドコにいるんだ？」

「あ？」

身体を曲げて一瞬で立ち上がり、そこまで言って遼平は身体が自由動くことに気づいた。流石裏社会の闇医者、一日で毒は完全に抜けきっている。

「治ってやがる……」

「俺にかかれば一発だって言っただろう。そこまで動けりやもう退院していいぞ」

「純也は帰ってきたか？」

「いや。家に帰ったんじゃないか？」

「そうか。……悪いが今回もツケにしてくれよ」

「しょうがないな、まあ、今回だけは大目に見てやる。……そうだ遼平、言い忘れてたんだがな、」

上着を羽織って早速出て行くこうとする遼平に、獅子彦が声をかける。遼平が振り返ると、壁に背中をもたらせて煙草をくわえながら

天井を見る闇医者がいた。

「俺のところはスカイとは違う。孤児院じゃねえよ、子供は預からん。……それと今までのツケ、払わなかったら承知しないからな」

「……わあってるよ、じゃあな」

もう振り返らずに遼平は薄いドアから出ていった。一度も、獅子彦と瞳を合わせずに。

「……死ぬなよ……」

紫煙を吐きながら無意識のうちに獅子彦は呟いていた。直後、彼の通信端末が鳴り出す……。

## 第四章『亡友のために』(1)

「ハ〜イツ、おっはようございマース！」

いたって陽気な声が、朝の花屋『月花』に響いた。店の奥から、ひよこつと白銀の髪の少年が出てくる。

「あれー？ キミはだれかな？ ボクは時雨サンに会いにきたんだケド」

「時雨さんのお知り合い……ですか？」

明らかに外人の長身の男に、純也は首を真上に上げて対応する。

黄土色のマリモヘアーに灰色の瞳の、白人だ。年齢は二十代後半……といったところか。

「ん〜、まあそうなるかな。見ない顔だネ、キミは？」

「僕は純也です。このお店の人間じゃないんですけど」

「純也くん？ どうかで聞いたコトあるような……シルバーの髪の……」

「僕を知ってるんですか？」

「フッフ〜ン、ボクはこれでも情報屋だからネン。あ、これメーシね」

そう言っつて外人は一枚の名刺を差し出す。そこには『情報屋ハイテンション、フェイス・B・イゼラード』という文字が英語の横書きで記されていた。

「ボクはフェイス。『フェツキー』って呼んでネ！」

「あ、はあ……。それで、フェツキーさんは何のご用ですか？」

「『フェツキー』でいいヨン。コレは秘密なんだけどネ、時雨サンに頼まれテた『ロスキーパー』の情報を持ってきたんだヨ」

全然秘密にしていけない様子で、面白そうにフェイズは純也に耳打ちした。純也は、自分がそのロスキーパーであることを言うべきか悩む。だが、このままだと決まりが悪いと思い、結局は。

「あの、僕もロスキーパーなんですけど……」

「えエ！？ しまッタなあ、報酬がもらえなくなっチャウよ。純也くんさ、今の秘密にしてクレない？」

「はあ……別にいいですけど……」

（それで丸くおさまるのか？）と純也は不安になる。なんだか自分がいけない事をしてしまったみたいだ。

「でもなンデ《ロスキーパー》のキミがここにいるのかな？ 純也くん……ああ、そーいえバ情報の中にあつたナ。確か、最近ロスキーパーに入った子だよネ」

「はい、僕はその……今ちよつと時雨さんのお手伝いをして……」  
フェイズのテンションにやや押され気味な純也。こんなに解放的な情報屋がいていいものなのか？

「時雨サンもわからないヒトだネ。まあイヤ、じゃあコレ時雨サンに渡しといてくれる？」

フェイズは鞆を荒してから、一冊のパンフレットのよつなモノを取り出して、純也に手渡した。表紙には『愉快なロスキーパーの全（中野区支部対応版）』とある……なにやら限りなく怪し過ぎる。そもそもロスキーパー本人に渡していいものか？

「わ、わかりました……」

「アリガト！ ジャーネ！」

そうしてまさに『ハイテンション』な情報屋は手を振りながら走り去っていった。朝の爽やかな風を残して……。

「純也さん、どうしました？」

「あ、時雨さん……。あの、フェイスさんっていう情報屋さんが今コレを渡しにきたんですけど……」

「あら、まあ」

赤い派手なパンフレットを純也から渡され、奥から出てきた時雨は手で口を押さえて驚いた表情をする。そのすぐ後ろにいた少女はまだ眠そうに目をこすっていた。

「電子メールで、とお願ひしたのですが……ご丁寧な情報屋さんですなえ」

「いや、そーい問題じゃないと思うんですけど!」

「どーい問題でしょうか?」

「だから……それはその……」

どう言えがいいのだろうか? 当事者だとわかりながら情報を渡してしまう情報屋はまずいだろうか、それを知ったら焦って奪うべきだろうか……。純也でさえ思いつく常識なのに、それが通じない。裏社会とは案外、こういう人間ばかりなのだろうか?

「実はあの日あなたが帰った後、情報屋さんに警備会社で働いている紺髪の間人はいないかと、検索をかけてもらったんです。そうしたら《ロスキーパー》の中野区支部という所にそれらしき人物がいるという情報をもらいました……。それで先日は挑戦状を出した次第なのです」

「そうだったんですか……」

結果的に自分が引き金を引いてしまった事に、純也は複雑な気持ちになる。自分さえ何も言わなければ、こんな事にはならなかったのに。

「そういえば、どうして時雨さんは怪盗なんてやってるんですか?」

「それは……スカイの資金稼ぎです。グループを保つためにはお金が必要なので」

「でも、どうして『怪盗』を?」

警備員としては不謹慎な言葉だが、純粹にそう思ったので口にする



時雨はその言葉に、思わず叫んでしまう。

「そんなっ、相手はあの遼平なのですよ!? いくら人数を集めても……殺されるだけではありませんかっ!」

「でも……でも俺達だって翼さんの仇を討ちたかつたんです! 俺達の、恩人だから……!」

先日はあんなにガラの悪そうだった男の声色は、素直なモノだった。それだけで、純也には過去のスカイ幹部がどれほど重要な存在だったのかわかる。

「今西エリアの裏路地にいます! 早速リーダーに報告をっ」

「……その必要はありません。私が行きます」

「時雨さん!」

「あちらからわざわざ出向いてくれたのでしたら良い機会です、復讐を果たさせに来たようなもの。私一人で充分です」

そう重々しく言って時雨は流れる長髪を後ろで結わえた。ちょうど着物姿だった時雨は、そのまま店を出て行こうとする。

「お姉ちゃん! どこ行っちゃうの!」

「大丈夫よ、必ず帰ってくるから。あなたはお店をよろしくね」

「うん……」

少女はまだ心細そうに頷いた。純也はよく知っている、独りにされるのが怖い眼だ。

走っていつてしまった時雨を、純也と少女は見送る。少女の瞳に宿るのは孤独にされるのではないかという不安、恐怖、焦燥。

しばらく立ち尽くしていた純也だったが、やっと我に振り返り一歩踏み出す。早く行かなくては、もしかしたら遼平は

「っ?」

後ろから服を引っ張られる感覚に、純也の足が止まる。振り返ると、自分の服袖を名の無い少女が俯きながら握り締めていた。

「……だよ……」

「え？」

「あたしを独りにしないでよ……みんなあたしを置いてくの……？」  
いつも強気だった肩が震えている。独りにされるのが怖くてたまらないのだろう。痛いほど純也にはその気持ちが理解できる。自分も昔、こんな表情で独りで震えていた。

純也は片膝をつき、少女の震える肩に手を置く。目線が少女と重なった。

「そんなこと無いよ、君は独りじゃない。大丈夫、ぜったいに。大切な人を信じている時、人は独りじゃないんだよ。必ず、その人と一緒にあるから……。だから、君は時雨さんを信じていてね」

「うん……わかった」

涙ぐんでいた少女が顔を上げる。にっこり微笑んで、純也は立ち上がり前へ進みだす。

信じていれば……きつと独りじゃないから。それを自分自身に聞かせるように念じながら走る。少女が昔の自分とかぶってしまった。だから、放っておけなかったんだろう。

純也は風を集めるとビルの屋上まで一瞬で跳び上がり、自分の大切な人のもとへと駆けていった。

#### 第四章『亡友のために』(2)

ゴミがアスファルトの所々に散らばる裏路地。懐かしい暗い路に、  
遼平は再び立っていた。

(やっぱり変わらないんだな、ココは……)

「おい、誰だてめえ？」

早速、縄張りに入ってきた侵入者に、ガラの悪そうな若者達から  
声かけられる。遼平は面倒臭そうに口を開いた。

「はっ、お決まりの台詞だな。『俺は蒼波だ』って言えば、それで  
いいか？」

いつものにやり顔でじつくりと久々に見るスカイのメンバーを  
観察する。相変わらず、青いリストバンドがメンバーの証らしい。

若者達は、驚愕と憎悪の色を顔に浮かばせて。

「あんたまさか……裏切り者のっ!？」

「なっ、なんでココに来た!？」

「てめえらに用はねえんだよ、時雨を出せ」

「お前、今度は時雨さんを殺す気か!？」

「……さあ、どーだろうな」

ビルに遮られて狭い空を見上げ、遼平は煙草の箱を取り出した。  
顔を下ろしライターで何気なく火をつけ、紫煙を吐く。

「お前らじゃ相手にならねーよ、早く時雨を呼んでこい」

「くそっ」

若者の内の二人が遼平に背を向けて走り出す。残った者は畏怖の  
瞳で遼平を見つめ、その場に立ち尽くしていた。だが。

「……ちっ、俺の言った言葉の意味がわからねえのかよ」

聞き取った音に、遼平は舌打ちする。若者の一人が呼んできたの

は、時雨ではなく、スカイの若者達だった。……皆、翼を尊敬し、慕っていた人々。

「翼さんの仇討ちだ！」

「最低の鬼、ここで死ねえ！」

遼平に罵声を浴びせながらも、《鬼》への恐怖でなかなか襲いかかってこない。だが、その『言葉』という音だけで、遼平の傷をえぐるのには充分だった。

「……じゃあかかってこいよ、俺が憎いんだろ？ 翼の仇、とってみるよ」

「てめえに言われなくたってっ！」

無防備にも瞳を閉じた遼平に、重い鉄の棒が振り下ろされる。遼平は避ける素振りも見せず……避ける気すら無かった。

（この人数くらいなら袋叩きにされても俺は生きてるんだろうな……身体だけはムダに頑丈だし。ま、今ここで死んじまうとヤボ用が果たせねーし、ゆっくりやられながら時雨を待つ、か）

……なのに。  
鉄が直撃する痛々しい音を、遼平の耳はしっかりと聞き取れた。

「……は……??」

視覚より聴覚に頼って生きている蒼波の人間だからこそ、目を閉じていても周囲が理解できるはずなのに……全く痛覚を感じない？ それを不思議に思って視覚を戻してみると、予想もしなかった光景があった。

「……はア、これやからアホな仲間を持つと苦勞が絶えんのやねえ」  
「フン、そんなコトは随分と前から知っていただろう。何を今更」  
「ああ、もう今度ホンマに人事相談電話しようかなア。知つとる？ 今、フリーダイヤルで無料なんよ」

「最近は仕事の過勞死が多いと聞くからな。……だが、表の人事相談だぞ、何と言つつもりだ？」  
「んなコト、決まつとるやろ」

細い鉄柱を受け止めた木刀は、軽く薙ぎられるだけで鉄を遠くへ飛ばす。そしてその襲いかかってきた男の眉間には、黒の銃口が突きつけられていて。

「職場の仲間にアホで馬鹿でどーしようもないヤツらが多いんですけど、どないしたらいいでしょう？ ……つてな」

「……その中に俺も入れているのだとしたら、即行で貴様を射殺するぞっ」

「おー、怖っ」と冗談混じりに苦笑する真と、「で、俺は入つてなかるうな？」と釘を刺す遼斗。自分の前に立ち塞がった二人に、遼平は目を見張っていた。

「何してんだよ、お前ら……」  
呆然と、口から率直な言葉が出ていく。何故ここにいる？ どうして……。

「……あんたの目的を果たして来いや。それがどんな結末でも……」

遼平が選んだ道なら、ワイは後悔しない」

「相変わらず愚かな奴だ、このような場所で潰す時間など無いくせに」

「お前ら、《真実》を……!?!」

「「知らん」」

キツパリと断言され、肩すかしを喰らう。「じゃあなんでだよ！

？」との混乱と苛立ちの声に、二人は背を向けたまま。

「んー、なんとなく？ ま、過去の清算、してこいや」

「遺言があるのなら聞いてやらないこともないが？」

「……………純也のこと、頼む」

「ああ、心配せんでエエ」

「元より見捨てる気はない」

その返事を聞く前に、遼平はビル壁へ跳躍、さらに壁を蹴り飛ばす反動で若者達の上空を跳んで裏路地の外へ去っていった。だが、仲間の言葉はしっかり聞きこえていて。

「お前ら、《鬼》の仲間か!? 何者だっ!?!」

「そういう台詞は、まず己が名乗ってから言うものだ」

「あんだ、そのお堅い言葉まだ使つとんの？ 相手の自己紹介を待つとる馬鹿真面目な殺し屋って、あんだぐらいやん？」

「貴様は礼儀作法というモノを教わらなかつたのか？」

「ええー、しょっちゅう人を射殺しようとするヤツに言われたかないわアー」

この人数相手にふざける二人組。「とりあえず、名乗つといた方がエエんちゃう？」と銃を握る男に背を預けて。

「……《消去執行人》、エクスキューショナー」

「と、《愛の剣士》、ここに見参！」

黒い銃と木刀が、同時に構えられる。どこまでも気高く、勇壮に。

「消去執行人っ？ どうしてあの暗殺屋が！」

「なあ、エクスキューショナーは知ってるが、『愛の剣士』って誰だ？」

「「さあ??」」

東京裏社会で有名な澁斗の二つ名以前に、『愛の剣士』とかいう変テコな若者も注目を浴びていた。複数の若者が怪訝そうに首を捻る。

「なんやつ、ワイを知らんとはモグリかあんさんらア!？」

「ココは裏社会だから、全員モグリではないか？」

澁斗の適確なツツコミが。本名を名乗ると素性がバレるので、お互いの名は決して口にしない。遼平がロスキーパーと繋がっているのを、知られてはならない。

「せつかくの夫婦水入らずの新婚温泉旅行を邪魔しおって、よくも

「っ！」

「貴様らの仲に水が入ったことなどあったか？」

「ワイとユリリンの幸せな時間を邪魔した罪は重いでエ！ わざわざ特急で帰ってきたんやからなっ！！」

「俺が連絡したら勝手に帰ってきたくせに……」

関西弁の若者は、隣りの男の言葉を全く聞いていない。ため息を吐く《消去執行人》と誰に怒っているのかわからない（自称）《愛の剣士》の耳だけに、声が届く。

『二人とも、真面目にちゃんと大騒ぎしてよね！』

「くだらん、何故俺が蒼波の囷を」

『澪斗、腹筋でお腹から声出してっ！』

「何と叫べばいいのだ？」

「このタコどもが、オラに刃向かって犬のエサになりたいんかバカ！」とかつて叫べばエエんやない？」

『真それナイス！』

「……音速で貴様らを畜生のエサにしてやりたいのだが、まずはこいつらを引き留めるのが先決だ。やるぞ」

イヤリングからの希紗の無線を聞くかぎり、どこか屋上からでも監視しているのだろう。スカイの若者達の目がなければ、澪斗はそちらへ睨みつけたい気分だった。

澪斗から事情を聞いてすぐ、真は東京に戻ってきて、遼平の裏切りの《真実》を知っているであろう獅子彦に連絡を入れた。そして駆けつけてみれば案の定、というわけだ。

怒声をあげて襲いかかってきた一人の若者が引き金となり、二人と乱闘が始まる。

「俺を援護しろ！」

「ああ、後ろは任せとき」

息が合ったように銃口を、剣先を、お互いに向け合う。

刹那にして二人の位置は逆になり、互いの背後に迫っていた者を倒すっ！

真は地を蹴って澆斗を横切り、彼を殴ろうとしていた者へ。澆斗は真の後ろで鉄パイプを振り上げていた者へ。

そして接近戦になると不利な澆斗のために、真は木刀状態の阿修羅で衝撃波を放って澆斗の前方を空け、自分の死角に迫っていた者への回し蹴りも忘れない。

本来、『援護』とは敵に近づく前衛者を後衛者がフォローするための作戦だ。しかし、彼らの場合はそれが逆。遠距離戦を得意とする澆斗を、中距離戦の真がカバーするのだ。意外にも、このタッグで戦う彼らは社内でトップの実力を持つ。

「粘着性があるようだが、希紗、今回のノアの弾丸は何だ？」

『はい、今日の弾丸は《とりもち》です！ スカイの人達を傷つけないように無害なモノにしたのよ。手足を狙えば、負傷無く身動きを止めるわ』

「《とりもち》……俺は今、殺し屋を名乗っておきながら《とりもち》を撃っているのか？」

すんごく複雑そうな澆斗の声色に、希紗は屋上で笑い転がっていた。その音に、どんどん澆斗の顔が不機嫌に染まっていく。

そんな仲間を横目に、真はざっと若者達の気配を読む。

「希紗、スカイのやつらは今どれくらいおる？」

『私の最新メカ、《P I S W》によると、半径二十メートル以内にはざっと五十人ね。このリーダーにかかれば熱によって生体反応がわかるんだから！』

「なんやえらい機械作ったなあ。英語か？ ハイテクやねえ」

『命名したのは私だけだね！ 「《ピ》ピッと《生》きてるか《死》んでるか《わ》かーるメカ」、略して《P I S W》よっ！』

「……すまん希紗、さっきの言葉、前言撤回してもエエ？」

脱力しながらも、真は澗斗の死角でナイフを振り上げた若者を左手のみの突きで吹き飛ばすっ！

『スカイ』を傷つけないように、けれど遼平を追わせないように。

それが、あの仲間に出来る最後のコトかもしれないと、真は一刹那だけ空を見上げた。

「ワイは知つとるよ、東京を治そうとした青い《空》の希望を、あんたも担ってたことを」

第四章『亡友のために』(3)

比較的表通路に近い所まで来て、遼平は脚を止める。ここで待っていれば直に来ると、わかっていた。もう一度、煙草を取り出してくわえる。

微かに風が吹いて紫煙が揺れ、遼平はふと純也を思い出す。

(結局お前とはケンカ別れ、か。お前も俺を憎んでおけよ……俺に存在価値があるとすれば、《憎しみによって力を与えるコト》だろうからな。真達がいる、お前はもう独りにならない。だから

)

『遼平』

呼ばれた気がして、空を仰ぎ見る。けれどその声は、遼平の中から聞こえてきていた。

『遼平……俺の最期の頼みを聞いてくれないかな……?』

『翼っ、俺は!』

過去の声が聞こえる。思い出したくなかった、しかし忘れてはならない記憶。そう、あの日に

「お待たせしたようですね?」

「別に構わねーよ、ヤボ用だからな」

砂埃の先に、やはり変わらない着物姿の時雨がいた。煙草をアスファルトに落とし、しっかりと火を踏み消しておく。

(ああ、あなたはいつもココに似合わないような着物着て、俺のこ

と子供としか見てなかったよな。あんたの視界には翼しかないことを知ってて、それでも俺はあんたのことを 想ってた。だから……《俺》を憎んで、俺を殺すことを糧にして生きてくれ

「野暮用、ですか。私にはあなたに大事な用事が有ります」

「じゃあそつちから先でいいぜ。俺のはヤボ用だからな」

握られていた薙刀、《十六夜》が遼平に襲いくる。

黄金の刃は、貫いた肉から噴き出る紅で染まっていった。

自分の腹部から噴き出す血を、遼平はぼんやりと見下ろしていた。そして、ゆっくりとその刃を握る女へ視線を移す。

その激痛は、腹部ではなく、鋭く、心へ。

刃を勢いよく抜かれた反動で、身体は仰向けに崩れていく。内臓と血液がアスファルトにぶつかる音が、生々しかった。

いつかこんな日が来ることを、知っていたくせに。忘れようとしていたのは、いつからだった？

翼の死を受け入れた時？

ロスキーパーに入った時？

……純也と、出会った時？

「は、ははははっ」

ひどく愉快そうな、乾いた笑い声が思わず漏れる。ビルの隙間から見える、青空へ……。

「な……！ 何が可笑しいのですか！」

激しく出血して倒れながら笑い続ける男へ、時雨は怒鳴る。何故だろう……彼女の手足がガクガクと震えている。

（翼、俺はなんて滑稽なんだろうな？ 親友を殺して、愛した奴に殺されて、それでも俺は、）

「……それでも生きるんだぜ？」

動かなければ傷口が開かないのに、遼平は起きあがってゆっくり立ち上がる。喉へ上がってきた血が、咳と同時に足下へ落ちる。

「あなたが……わかりません。死にたいのですか、生きたいのですか？」

『生きる』と口にしておきながら、攻撃を避ける素振りも見せない。そんな態度が、時雨を迷わせる。

「さあ、俺にもわからねー」

「では、質問を変えます。純也さんを拾ったのは何故ですか？」

「純也に会ったのか！？ 純也をどうしたっ？」

「何もしていません。彼は、翼の死とは関係無いのでしょうか？」

平静を保とうとしている女の顔と、それを聞いて安堵の表情を浮かべる男。時雨は嘘をつくような人間ではないと、遼平はわかりきっているから。

遼平の安堵する顔が、時雨には理解できなかった。何故、あの子供にここまで必死になるのか。

「純也は……似てるだろ、アイツに」

「ええ……彼は、翼と同じ空気を持っていました。本当に、似すぎているくらいに」

「まるで生まれ変わりみてえだろ？ あの呑気な顔とかよ……」

無防備に空を仰いで放つその言葉は、昔の懸命で、楽しかった過去を思い出させて。この悲惨な三年間が一夜の悪夢ではないかと、時雨に願わせて。

「翼に似ているから、拾ったのですか？ 一体何のつもりで？」

「そんな理由じゃねーけどよ。あいつはな……俺のせいで、スカイの人間に襲われたんだよ」

「え……」

「もちろん、翼が死んでからスカイを抜けたヤツらだが……俺と出会った時に一緒にいたところを見られたせいで、純也は襲われ……瀕死に陥った。そして今も、その傷は純也を苦しめ続けている」

一つの罪で二つの罰を背負う男。なのにどちらの罰からも逃げない男。

「時雨、俺はこんなコトを言える義理じゃねえんだが……頼む、純也には手を出さないでくれ。純也は、襲われた記憶も無い」

「わかりません……遼平、あなたがわからない！ 翼を殺したのは本当に……？」

「俺だ」

躊躇いの無い返事。合わせられた視線は、重たい本気の眼だった。「俺が翼を殺した。邪魔だったんだよ、俺の上に立つヤツは。何と呼ばれようが、俺が東京裏社会で今『最強』だ」

遠のきかけていた時雨の殺気が、蘇る。それに満足と……呵責が心に溢れてきて、遼平は顔を逸らさずにはいらなかった。

女の殺意と男の思案は決して触れ合うことなく、再び金の月が肉を裂くべく、横へ振られる。

『遼平っ、遼平！』

（なんだよ……お前とは逝く場所が違いーんだよ、俺達はもう二度と会えねえんだから……もう呼ぶなよ）

呼ぶなと言うのに……何度も何度も遼平の名は叫ばれ続けていた。

#### 第四章『亡友のために』(4)

「遼っつー!!」

一陣の風が吹き、時雨は遼平から距離をとった。片膝を付いて今にも倒れそうな遼平の前に、白銀の髪の少年が立ち塞がる。

「純也!? お前、なんでココに……!!」

「話は後だよ! 遼、まだ生きてるよね!?!」

「バカが! そこをどけっ」

「できないよ! どうして死にに來たのさっ!」

「俺は……うるさいっ、どけ!!」

「いやだっ!!!」

今までの純也に無い激しい拒絶に、遼平は一瞬怯む。背を向けて時雨を見る瞳はいつになく鋭かった。

「時雨さん! 復讐は僕を倒してからにしてもらいます!」

「仕方ありませんねっ」

両者が地を蹴って激しい攻防が始まる。何故か、女の口元が僅かに引き上がって。

距離が限られている薙刀より、やはり風を操る純也のほうが有利だった。純也の作り出した見えない風の刃が三日月の刃を受け止め、弾き返す。その勢いで時雨に一瞬隙ができ、そこで鳩尾に純也が一発当てようとした瞬間。

少年と女の狭間に、銀の一閃！？

純也の拳に何か物が凄く速さで当たり、軽く裂いていく。風さえも切ったその物体は、銀色に輝くロザリオだった。

「っ！」

純也は切られた右手を押さえ、そのロザリオが飛んできた方向へと顔を向ける。右斜め上……ちょうどビルの屋上辺りからだ。

「……ん、ボーイ二人でレディの相手をするのハちよつとイタダけないナ」

ビルから着地してきた長身の影に、純也は見覚えがあった。朝会ったばかりのあの情報屋 フェイズではないか。

「フェツキー！？」

「誰だ、あいつ……？」

何故かほとんど人数が増えてくるこの状況に、遼平は頭を抱えた。どうしてこうも、すんなりヤボ用が果たせないのか。

「情報屋さん！ 助太刀は無用です！」

「そう言われテもネ時雨サン、こー見えてボクはジェントルマンだからサ、見逃せないンだよネ」

「いや……ですがこれは私と遼平の問題でして……」

「マあマあ、細かいコトは気にしないネー。楽しソウだからサ、ボクも混ぜてよ」

「フェツキー、これ全然楽しくないよ？」

真剣だったムードが一転、フェイズのせいで何やら変なテンションになってしまった。その場にいた全員が肩すかしを喰らう。

「とりあエズ！ ボクは時雨サンの味方だからネン。さ、シヨープシヨープ！」

「え……う、うん……」

時雨の脇に立っていかにも楽しそうに構えるフェイズ。彼が加わったことで『復讐』はどこかに吹き飛んでしまったように思える。

「純也、本当に逃げてくれ……もういい」

出血で息も絶え絶えな遼平が、地に膝をついたまま言う。

「……そうやって、僕をまた独りにする気？」

「いいか純也、お前はスカイとは関係無いんだ……関わってはいけないんだ。それに俺は人殺しで……」

「違うよ。遼は人殺しなんかじゃない」

「お前は知らないんだ！ 俺は血を愛し、死をもたらし、破壊を求め  
」

「嘘つきっ！ そうやって自分に嘘ついて、勝手に悪者になって、そのまま独りで……逝かないで……。僕、ずっと遼を信じてるよ。迷惑でも、傲慢でも、ずっと」

「やめろ、純也……俺は……やめてくれ……お前が傷つくだけなんだ……」

「……遼はね、人を愛して、命を大切に、護りたいだけなんだよ？ 自分でも気づいてるんだよね？」

しばらく遼平は不意をつかれたような間の抜けた顔をしていた。

……ただ、その愚かさが自分によく似ていると、気づいた。

「生きてよ」

『生きてね』

また、声が聞こえた。今度は純也の声と重なって。友の最期の言葉……なんでこんな時に思い出す？

「ね、遼？」

「……バカだろ、お前……」

「うん、そーだよ。馬鹿でいいよ、遼といられるなら」

「あー、バカにはつきあってらんねえな」

遼平はゆっくりと立ち上がり、腕を染めている血を振り払う。あの軽い笑みを取り戻した男の顔は、何か吹っ切れていて。

「本気を出しなさい、遼平！」

「わあつたよ、後悔するなよ？」

「ヤッホー、楽しミだネー！」

「だからフェツキー、なんか間違ってるって……」

四人がそれぞれの表情で地を蹴る。

第四章『亡友のために』(5)

『え……何よコレっ!?!』

「どないした、希紗!」

無差別な澗斗の《とりもち》を避けながら若者を薙ぎ払う真が、突然の希紗の言葉に反応する。

『ここから直線距離にして二百五十メートル先地点に、百人以上の生体反応をキャッチ! おかしいわ……もうスカイの戦闘員はいないはずなのにっ』

「ちよつと待て、それはどっちの方角や!?!」

『北北東よ!』

「おい……そちらは蒼波が向かった先ではないか?」

『う、うん! さっきまでは四人の反応しかなかったんだけど、一気にその四人に近づいてるの!?!』

「どっついうコトや……スカイの増援か? それとも、まさか」

「ああ、その可能性の方が高いだろう。……厄介だな……」

初めて、《鬼》の仲間達に焦りの表情が浮かんだ。

戦闘開始の静寂の中、突然遼平の耳が音に反応した。フェイズと時雨に飛びかかろうとしていた純也の襟首を引っ張る。不審な音がする……複数、しかもかなり多い!?

「うわっ、どうしたの!?!」

「囲まれてやがる……!! 誰だ!?!」

遼平の叫びが急にシンと静まった路地に響く。スカイか？ それとも……。

「……おおっと、気づかれちゃったな、どうしてだ？」

「あなたは……!？」

路地の前と後ろからそれぞれ数十人の強面の男達が現れる。時雨が驚いているところを見ると、スカイのメンバーではないらしい。

「せっかく『スカイ』が弱体化してきたトコを不意打ちする作戦だったのによお、あなたのせいで台無しじゃねえか」

「そりゃ悪かったな。わざわざ説明どーも、どこのグループだ？」  
「原宿の『キラール』ですね!？」

「正解だぜ、キレイなねえちゃん。……おお、あなた幹部の流華か。これはこれは運が悪かったなあ」

まったく恐れていない様子で、『キラール』とやらのリーダーらしき一見優男なサングラスをかけている男が一步前に踏み出た。軽い雰囲気のある男だが、放つオーラが他の人間とは明らかに違う。

「どうやら偶然彼らの襲撃決行日と重なってしまったらしい。幸いか不幸か……。」

「うー、本物の『キラール』だヨ。スゴイネー」

「フェッキー知ってるの？」

「うん、原宿の『キラール』ってイッたら、今は東京で一、二を争うグループだよ。『スカイ』が三年前半壊してから力をつけ始めたグループネ」

「へえ、そうなんだ」

心の底から感心したように純也が声を上げる。遼平は、（こいつら本当に敵同士って意識あるのか？）と背中越しに疑問を抱いた。

「ねえちゃんはともかく、あとの野郎三人は誰だ？ 『スカイ』の戦闘員に白人とガキはいないはずだが……。」

「むむー、ジャパニーズボーイはヒドイナー、ボクのこと差別発言するヨー！」

「僕だってガキじゃないもん！」

「お、おい落ち着けよお前ら……」

腕をブンブン振り回して怒るフェイズとぴよんぴよん跳びはねる純也の襟を掴み、遼平は二人を制止する。（挑発でもないのに乗るやつがあるかよ……）といつもの自分は棚に上げて遼平は思う。怪我のせいなのか、遼平のテンションは低い。

「気配は消してたんだが、どうしてバレたんだあ？」

「けっ、足音聞こえまくりなんだよ、俺の耳に届かねえわけねーだろ」

己の耳を指差してから、相手へ親指を下に突き出す。そんな挑発的な言動に、一瞬だけ眉間にシワを寄せた優男は。

「……お前もしかして……あの裏切り者の蒼波か？　なんでそんなヤツがここに居る？」

「名前当てたことだけは褒めてやるよ、そのひよろっちいの。だが俺がどこに居ようと関係ねえだろ、わかったら今は取り込み中だから早く帰れ」

「ははっ、昔の《鬼》ごときで俺達が退くとも思ったのか？　生憎お前の用事に付き合ってるほど暇じゃないんでね、俺らは目的を果たさせてもらうぜ」

「させません……ここはあなた達には通しません！」

時雨が大きく腕を伸ばして立ち塞がる。既に遼平に対しては警戒を解いた形となってしまうたが、本人はそれにさえ気づいていない様子だ。

今は復讐の人間ではなく、グループを守る『幹部』として時雨は存在していた。そんな時雨に「やっぱり（自称）ジェントルマンだから」という理由でフェイズが肩を並べ、「もちろん放っておけない」と純也も身構える。遼平は……少しの間、面倒臭そうに頭を掻

いてから。

「だあー！ ったく、どーしてこう邪魔ばかり入るんだよ！？  
こうなったら邪魔するヤツ全員ブツ飛ばしてやるからな！」

時雨に背中を預けて純也と並ぶ。彼女の視線には気づかないふりをしていた。

「……どうして素直に『手伝う』って言えないのかなあ？」  
「うるせえ」

ぶっきらぼうに遼平は純也からも顔を背ける。こうして四人は一時休戦となり、新たな敵に向う形となってしまった。

第五章 『生を願え、死を想え』(1)

第五章 『生を願え、死を想え』

「やっぱりあの大群が四人を襲い始めてる……もうっ、誰なのよ！」  
手元の生体反応探知レーダー、命名《P I S W》に映る複数の赤い点へ、希紗は苛立ちの声をあげる。

そもそも中央の四人は誰だ？ 遼平と、彼が《目的》を果たしたかった人物はわかる。しかし、あとの二人は……？

そこでマナーモードにしてあつた携帯端末が、いきなり振動する。通話のみの連絡、『電話』だ。相手は……『遼平』の文字。すぐに着信ボタンを押す。

『希紗っ、まだ真と紫牙はそこにいるか!？』

「ええ、まだスカイを引き留めてるけど……そっちこそどうしたのっ、今、大勢に襲われてない!？」

『ああ……少し厄介なコトになつてる。頼みがあるんだ、よく聞いてくれ。……絶対に、スカイのヤツをこっちに近づけるな』

「相手は誰なの!？ どうしてっ？」

『「キラー」っていうグループの襲撃に、鉢合わせちまった。だが、好都合だ、今キラーとスカイがぶつかれば、確実にスカイは負ける。誰一人として傷つけられねえ、絶対にスカイの人間をこっちに近づけるな!』

中央にいた四つの点が、囲んでいた大群へそれぞれ突っ込んでいく。希紗は片手で端末を耳に当てながら、もう片手で、『キラー』ではない四人を見失わないように目印をつける。遼平達四人には、赤い点の周りに緑の輪っかがつく。

どうやら遼平は器用にも戦いながら電話しているらしく、乱闘の

喚声も届く。

「わかったわ、それは真達に伝える！……ちよつと待って、遼平、もしかして……怪我してるっ？」

『え……』

その言葉の途切れ途切れに聞こえる荒い呼吸、そして緑で囲まれた点の一つだけ動きが鈍く……赤色が黄色に変わっていく。青色になれば、生体反応が消えた証拠。つまり色が変わるといふのは、体温を失っているということ。

「それ以上下手に動いちゃダメ！ かなりの重傷でしょ、死ぬわよ！？」

『……それでも……それでもいい、アイツに頼まれたんだ、スカイを護れと。とにかく希紗！ 真達に伝えてくれ……スカイをそこに留まらせておくようにっ！ それとお前らも来るな！』

「あつ、遼平っ！」

一方的に電話は切られ、リーダー上の黄の点は素早く動き始めた。歯を食いしばってから、希紗は無線を入れて屋上から二人の間を見下ろす。

「真、漣斗っ、遼平からの伝言よ！ 今、遼平はグループ『キラ』と戦闘中、スカイのメンバーを傷つけないためにも、絶対に一人残らずそこに引き留めること……！」

『キラ』やて！？ 遼平だけでなんとかなるんか！？』

「わからない……一応あと三人いるけど、それが誰だかわからないし、遼平は怪我してるみたいだし……」

『スカイを引き留めるのは俺一人で充分だ、貴様は死に損ないの蒼波を援護しに行けっ』

『せやな、そのほうが』

「それはダメ！ 遼平が、私達も来るなって……」

『本当に死ぬ気、か』

『あのアホがアっ』

二人の戦いながら無線に出る様子を見下ろしている希紗が、電子音に呼び戻されてリーダー画面を見る。

「へ……また……!?!?」

『今度は何やつ?』

「一人……新たな生体反応が、キラーとの乱闘へ近づいてる……!」

五分後。敵の数は半分まで激減していた。……たった四人のために。

敵から繰り出される武器や拳を、軽々と避けるフェイズ。だが、そのせいで他の味方にも攻撃が当たりそうになる。

「おい! てめつ、マリモ外人!! 避けてばっかいるなよっ!」

「ダツてボク通リスがりノ情報屋だヨ!?!? そんな急に戦えん訳ないじゃん!」

「てめエさつき勝負トカつて喚いてたじゃネーか! 戦えナイのかヨっ!」

「遼……喋り方うつってるよ……」

苦笑混じりの笑みで敵を投げ飛ばしながら純也はため息をつく。影響されやすい性格この上ない。

一方、時雨は黙々と敵を薙ぎ倒していく。わざと刃に敵が当たらないように棒の部分で殴り倒していた。時雨の操る薙刀《十六夜》は殺生能力を發揮すればとてつもない力を出す。時雨は殺しを嫌うためにわざと刃が刺さらないようにしているのだ。彼女は本来、殺生を嫌う人間。例外を除いては……。

「少しみくびつたな、やるじゃんアンタら」

「とつとてめえもかかってこいや! 俺が相手してやるよ!」

「おーおー、その傷でよく吠えるなあ。……それじゃま、ちよこっ

と遊んでやるか」

「リーダー!？」

サングラスをかけた『キラ』のリーダーがやっとその重い腰を上げる。途端に、強い殺気を感じた。

腰から何かを抜き、残像の残るスピードでその《何か》が攻撃を繰り出すっ！

「遼!」

いきなり純也が遼平の前に立つて風圧の壁を作り上げる。今の遼平では反応速度が追いつかない速さで、ボーガンの矢が放たれていた。風にぶつかり、矢は一瞬抵抗してそのまま落ちた。

「もうっ、ケガしてるのに無理しないでよ」

「ボーガンですか……厄介ですね」

その様子を横目で窺っていた時雨がぼつりと言う。このメンバーで遠距離戦ができるのは純也くらいだからだ。肉弾戦の遼平、中距離間の時雨の薙刀も届かない。……フェイズは問題外。

最新連射型のボーガンは、鋭利な矢先で一気に四連射を現実にする。

「くうっ」

容赦なく繰り出されるボーガンの矢に、純也は壁を維持するの限界だった。一本の矢が、ついに風を突き破って純也の横腹を裂いていく。

「遼……いつまで保つかわかんないよ、移動できるよね?」

「当たり前だろ、早く風を解け」

「じゃ、いくよっ!」

その声と同時に二人は左右に分かれて跳ぶ。追いかけてくる矢を両者なんとか避けていた。そう、サングラスの男は両手でボーガンをつつ構えているのだ。しかも両方が的確に狙ってくる。「逃げてるだけじゃ俺らを止められないぜ？ 早く殺り合おうぜえ、《邪鬼の権化》よお！」

「うるせーよひよろつちいの！ てめえなんかにゃ本気出すまでもねえっ！」

矢をやつとで避けている遼平には、あまり信憑性の無い言葉だった。売り言葉に買い言葉というやつで、とにかく何か言い返さないと気が済まないのだ。

遼平と純也がリーダーと戦っている間、時雨とフェイスはその他の男達を一掃していた。相変わらずフェイスはちょこまかと避けるだけだったが、それで敵同士相打ちをしていたので一応は戦力になっっている。

「なんだよ、つまらねえなあ。じゃ、そのガキから逝つとけ」

遼平を狙っていた右手のボーガンも、純也へ。合計八本の矢が、もう避けようの無い純也へ放たれた。気圧を調整する時間も無い！

遼平の少年を呼ぶ叫びも、その負傷した身体も、間に合わなかった。

第五章 『生を願え、死を想え』 (2)

「純也ああっ！」

遼平の思考に、あの紅が蘇る。白の世界の中、少年が流すおびただしい紅。己のせいで巻き添えになった、消えかけていく小さな命。また、それを繰り返したのか……？

「また、俺のせいで……！」  
戦意を喪失して無防備にも両膝をついてしまう。俯いた顔を、上げられない。

「チヨットちよつと遼平くん、ナニを勝手に早とちりシテるのかな？」

「は……？」

軽々しいおちゃらけた声に、遼平は思わず顔を上げてしまう。周囲にいたキラールのメンバーが目を見開いている先には……長身の外人。

「あ、ありがとう、フェツキー」

「いいヨ、気にしなくて。お礼なんてイラナイからネ。ボク、アップルパイが大好物なんだケド」

「……今度、フェツキーにアップルパイを作るよ……」

「えッ、いいのカイ？　なんだか催促したミタイで悪いナあ」

とても嬉しそうな外人の背後から、「あははは……」と少年の苦笑いが聞こえる。驚いたコトは二つ。

一つ。純也も、その前に立ち塞がったフェイズも無傷なこと。

二つ。フェイズの両手に握られた純白で細長い棒状の物体のこと。……その先端についているのは、大きく弧を描いた鎌。

「《マリア》……その大いナル御心に咎人を抱ケ」

二メートル近い大鎌が一度、軽く一回転する。情報屋の足下には、全て切断された矢の残骸。

「おいマリモ外人……そんなん持つてるんだったら、最初っから出せよ！」

「エエッつ、ダツテこれ護身用だモン！」

「護身用の大鎌なんてあつてたまるかあッ！」

「い、今はそんな事を言ってる場合ではありません！」

怒鳴る遼平と、大事そうに大鎌マリアを抱きしめるフェイズを、時雨が現実に戻す。

「てめえらボヤボヤしてんじゃねえッ、一気にかかれ！」

「は、はいッ」

「アゝア、キミたち、本当に『ジェントルマン』ノ何たるかがわかつてないネ〜」

片腕で背後にいる純也を下がらせ、フェイズは右腕一本で重量のありそうな大鎌を後ろへ振り引き、バックステップの反動までつけて右腕を振り切って手を放すっ！

ブーメランのように勢いよく回転する鎌が、白い円を描きながら若者の群れを蹴散らしていく……！

「なんだ!？」

「あつ危ねえっ!」

「ホゝラホラ、避けないト、その頭が身体とバイバイだヨ〜ン?」

「っっひいひいっつ」

フェイズのおかしそうな言葉に合わせるように、鎌の刃が残酷な白光を放つ。そして、自在に操られているかの如く《マリア》は所持者の右手に戻って。

「いいカイ? レデイ、チャイルド、そしてインジャー……怪我人には優しく接するのが、『ジェントルマン』『ソウル、魂ネ」

「Do you understand?」と、愉快そうにキラのリーダーへ刃先を向けて。

「フェツキーっ、いくらなんでも殺しちゃ!」

「んん? よ〜く見てごらんヨ純也クン?」

《マリア》に倒された者は皆、持ち手の棒の部分で強打されただけ。鎌の刃にやられた者が、一人もいない。

「リーダーサン、キミくらいの力を持っていれバわかるヨネ?」

敵は殺すより生かすほうが難しい《ってサ?》

「ははっ、要は、こいつらとてめえはレベルが違うって言いたいのか、白人ヤロー? お優しい紳士様じゃねーか、いいねえ、俺、お

前みたいなヤツ殺すの大好きだぜえ」

「……どうやらキミは、ボクが思ってたほど力は持ってイナイらしいネ」

舌なめずりをするリーダーと、もう一度を放とうとするフェイズ。しかしリーダーが上げた手は、メンバーへ合図を送るために。

「……でも俺は、《スカイを潰しに》来たんでね。野郎共をぶつ殺すのは後のお楽しみで、まずは幹部を潰させてもらっぜ？ やれ！」

キラーの全員が隠し持っていた拳銃から時雨へ、数十の弾丸が放たれる！

「……誰が殺らせるかよ、お前らなんか、時雨を」

「こんな卑怯なやり方、僕は絶対に許さないよ！」

「レディへの接し方ヲ、キミたちは幼稚園カラ学びなすべキだと思っネ」

時雨に背を向けて囲む男達が、全ての銃弾から女を護る。

大鎌の刃一回しで弾丸を弾いたフェイズ。暴風を上空から突き落として遮断した純也。そして……その身を盾にして体内に銃弾を受け止めた遼平だけが、力無く崩れていく。

「遼平！？ なんて……」

「っ、殺させねえ……絶対、にスカイを……時雨を護る、って……  
たのまれ……」

言葉の代わりに、男の口から血が吐かれていく。両膝と両手をついているのが限界で、身体に空いた無数の穴からじわじわと紅が流れて止まらない。

「遼っ、もう動かないで！」

「待つテ！？ リーダーサンが消えたヨ！？」

「……ここだよ、バーカ」

時雨を全員が庇おうとするのは予測内で。そして無傷で銃弾を防げる手段が無いのは遼平のみだと察して。その結果、遼平が立つ位置だけ、一斉射撃の後に無防備になるとの判断。

それらを全て計算していたキラのリーダーは、かがむ遼平の前方で、既に時雨の心臓位置へ矢を放っていた。

第五章 『生を願え、死を想え』 (3)

なんとかか立とうとした遼平の背は、何者かに蹴られて、再び男はアスファルトへ前倒れに。

そして、矢が肉体へ突き刺さる音が、聞き取れた。

純也の見開かれた青い瞳に、スローモーションのように映る、血しぶき。その紅を放つ、宙に浮かんだ小さな身体 矢に刺された、名も無き少女が。

「お、ねいちゃ……………」

「なんで……………」

瞬時に飛び出してきた遼平の背を踏み台に跳び上がった少女は、ゆっくりと女の腕の中に落ちる。心臓を射抜かれた、幼き少女の身体。

「どうして来たのですか!? なんで、こんな!」

両手を震わせながら、それでもぎゅっとしっかり少女の身体を掴んで、時雨は問う。どんなに力を込めても引き抜けないボーガンの矢。少女が上げた手を、時雨は握り締める。

「お姉ちゃんをね……………信じてたから……………大切だから……………あたしもう、独りじゃない、ね……………だから、」

歪んだ弱々しい笑顔で。

『しあわせだね』、と、音にならない言葉を最期に。

「い……っ、いやあああああ ……！！！！」

女の甲高い悲鳴は、廃ビルの壁に響く。

「僕のせいだ……僕が、この子を……」

絶対に来てはならないと、忠告しておけば。そうしたら、こんな悲しい幸せにはならなかったのに。強い呵責が、どこまでも純世の心を締め付ける。

「なんだあ、スカイはガキの預かり所かあ？　ちっ、だが今度は外さないぜえ？」

心底おかしそうに、笑いを堪えながらボーガンを再び構える男を、フェイズと純也が睨む。時雨は少女の亡骸に泣きついて、膝をつい

たまま。

しかし、この場の誰もを黙らせたのはフェイズでも、純也でも、ましてや時雨でもない……………突如周囲を支配した闇だった。

『真、澪斗、今一人の生体反応消滅をレーダーが確認！ 後から乱闘に入っていった人よ。遼平もどんどん衰弱して……………。えっ!?!』  
暗かった声が、いきなり驚いた高い音を出す。スカイの者達をほとんど昏倒させた頃だった。

「なんだ、蒼波が死んだか？」

『違うわ、逆！ 遼平の生体反応が回復、体温が上昇中……………って、きやあああっ!?!』

「希紗!?!」

悲鳴に屋上を見上げた澪斗と真は、瞬間啞然とする。晩夏でも高い太陽が消え、青空が黒一色!?!

「なっ、何やアレ!?!」

「希紗、どうした!?!」

『こ、これ全部……………蝙蝠よ!?! ビルの上を、蝙蝠の大群が飛んでる!?!』

無線から、希紗の周りを通過しているらしい羽ばたきと鳴き声の音がうるさい。生物としての本能でわかる……………蝙蝠達は、何かの危機を訴えている。

無意識の内に、二人の武器を握る手が震えていた。

「何なんだ、この悪寒は……！」

「ワイは知つとるで……かつての『スカイ』ナンバー二の男、《邪鬼》が目覚めたんや」

「このような殺気……これが蒼波だと!？」

守護業を始めて以来、男が放たなかつた気配。平和を愛するグループの中で、唯一《自ら》破壊をしていたと言われる男の殺気。

「まだ……エエ方や、これはまだ、『目覚めた』だけやから……」  
これで、完全なる気配ではないと? 去っていった蝙蝠によって戻ってきた日光のせいではない、冷や汗が滲斗に流れる。

『真つ、蝙蝠が向かつたのは、遼平達の方よ! やつぱり私達も行ったほうが……』

「あかんつ! 今の遼平には近づいたらあかん……むやみに近づいて、ワイがあんたらを護れる自信が無いっ」

二人の部下に怪我をさせない自信が、真には無かつた。《鬼》の怒りの鎮め方を知らない……いや、それは本人さえも……。

「リーダー!!」

「狼狽えんな! よく見ろ、ただの蝙蝠じゃねえか!」

そう強気に言い放つ言葉とは裏腹に、キラのリーダーから嫌な汗が止まらない。ビル壁の狭間を飛び交い、青空を隠す漆黒の翼。

「いつもの宋兵衛の群れじゃない……この子達、怒ってるよ……!」  
純也の緊迫した声色。ずっと空を見上げていたせいで気づかなかつたが、いつの間にか遼平が立ち上がっている。

『リヨウヘイ、憎悪の音、確かに聞こえたよ。僕達も憎いよ』

『人間にして我らが同胞よ、汝の怒り、我らもしかと聞き取った。闇を操るがいい』

その言葉を理解出来るのは、蒼波の人間のみ。闇を司る者のみ。

『……我が名は蒼波、音を統べし者。陽よ、汝が力を我に貸し与えよ。闇よ、汝が力を我が身に宿せ』

その歌は人間には聞こえないはずなのに、その場の全員が凍り付く。遼平が左腕を掲げた途端に、蝙蝠達が一斉に静かになる。

「ダメだよ遼つ！ そんな身体で『覚醒の調べ』を使ったら！」「自殺行為だ。覚醒状態が切れた時、身体が滅ぶ……。」

「やめて」と叫ぶ少年の声だけが、周囲の者に聞こえる音。

『眠りし力、今解放を望む。 我、覚醒を望む者なり！』

男の傷口から流れ出していた血液が、瞬時に固まる。ゆっくりと俯いていた顔を上げて。

その瞳を見ただけで、放たれる気で、失神する者達。それは……。

「……今までの生を思い、これからの死を想え。この俺を前に、それでも立つのなら」

《邪鬼の権化》などと生温い名で呼ぶのは相応しくない、本当の

《鬼》  
だった。  
た。

第五章 『生を願え、死を想え』(4)

「は……はははははっ、ガキ一人の命が何だっつてんだあ？　だ、からスカイは堕ちたんだよ……！」

無理にキラのリーダーが余裕を保とうとしているのがわかる、震える声。もう誰もが本能で理解しているのに……『次元が違う』のだと。

一步、ゆっくり、また一步。

《鬼》は黙したまま、一直線にリーダーへ歩んでいく。その闇の双眸を、向けながら。

「か、かかれ！　全員であいつを潰せっ！！」

「でっ、でもリーダー……！！」

「うるせえ！　いけええええ！！！！」

あまりの空気に狂ってしまった若者が、パニック状態で《鬼》に飛びかかる。前後左右、あらゆる方向から、一気に。

悪魔の翼を持つ《鬼》の同胞達の甲高い叫びと、耳だけが感じる不自然な風　　！！

地を蹴り、飛びかかっていた者達の身体が、何かに弾き返されたようにアスファルトへ叩きつけられるのは、刹那の出来事。

その瞬間だけ立ち止まっていた《鬼》は、再び一步ずつリーダーへ歩み寄っていく。瞳は一時も逸らされていない。その、瞳に映るのは怒りでも憎しみでもなく……ただ、虚無。心など、無い。

「今の……遼平クンに誰一人トして指一本触れテないヨ……！」  
「むしろ、遼自身も、誰にも触れてはいないんだよ……『音』だけで、人を弾いた……っ」

「あれが……仲間さえ恐れられた《邪鬼の権化》なのです……。心を闇に浸した、破壊の生き物……」

フェイズ、純也、時雨の誰も動けない。あの男は、今はきつと《遼平》ではない……振り返らせてはいけない。

「《鬼》を呼んだのは、お前だな？」

その声は、確かに純也のよく知る男の声なのに……重々しさで呼吸が止まりそうになる。その言葉を向けられたリーダーの男などは、もはや表情が恐怖を隠せていなかった。

「久々の力だからな、存分に味わわせたいが、」

淡々と重苦しいその声色が、《遼平》ではない。恐怖に打ち勝つてボーガンの引き金に力を込める速度は、《鬼》にとって永久と同等の長すぎる時間。

「……お前などには、味わう余裕……いや、価値すら無いみてえだ」

放たれた全ての矢は左手に掴まれ、右手でリーダーの首を絞めたまま持ち上げる。鉄製の矢数本が、男の首より先に握力で粉碎される。

「っ、ああ……にがああ……！」

もはや音にならない言葉は、強くなっていく握力に抵抗するように余力を振り絞って叫んだ。

「このっつ、鬼がああああっ……！」

傷口深い《鬼》の腹部へ至近距離で矢を発射、全てが刺さり、残された僅かな血液が流れ出す。

されど。

「お前に一つ、俺から教えてやるつ。聞こつが聞きまいが、どうでもいいけどな」

痛覚などもはや存在しないのか……歪んだ口元は、確かに微笑んでいた。狂乱の笑み。

掴んでいた首を離し、落ちてきた身体の足が地面に着く前に鳩尾へ左拳で突き上げる！

それだけで吐血をしながら上空へ飛ばされる男の身体は、あまりに無防備。《鬼》の姿が消えたのを確認するのは、リーダーの身体より高く跳躍した影が踵落としをその背へ喰らわせた時と同時に。重力よりも数倍の勢いで、アスファルトへ叩き落とされるっ！

骨や内臓が潰される音が、キラのメンバーに更なる恐怖を与えらる。恐怖の、果て無き奈落の底へと……。

うつ伏せでもう指一本動かすことの出来ない男の襟首を持ち上げ、《鬼》は言葉の続きを。

「人間の命なんざ、脆くてすぐ壊れる。……だがな、弱いくせに、それは何よりも尊いモノなんだよ。何故だかわかるか？ それを大切にするヤツには、《人間の》強さが宿るからだ。つまりな、命を嘲笑うお前はな、」

振り上げる動作さえ見えない、渾身の左ストレート……！！  
右胸に直撃を喰らい、怯えきっているメンバー達まで吹っ飛ばさ

れていくリーダー。微かな意識が、消えていく。その朦朧とした視界に、全身が紅に染まった《鬼》を映して。

「俺と同じ、《人間》じゃねえ《劣悪動物》なんだよ」

最後の言葉が聞こえたかは、わからない。ただ、《鬼》が左腕を上げた合図で一齐に蝙蝠達が路地へ降下、それに怯えてキラの者達は倒れた者を引きずって逃げていく。

襲撃者達が消え去った頃、蝙蝠が寄り添い慕うように、《鬼》が闇を愛するように、男の周囲だけが漆黒だった。

第五章 『生を願え、死を想え』 (5)

《鬼》の周囲を飛び回る蝙蝠達の羽ばたき音しか響かない、静寂。同胞達の中で、《鬼》はただ俯いて。

「遼……」

未だに凄まじい気配を発しているのに、純也は《鬼》へ近寄っていく。何故か……純也は、恐怖を感じていなかった。

少年が《鬼》の前に立つと、何かを察してそこだけ蝙蝠達が場所を空ける。また一步、純也は近づいて「遼」と短く呼ぶ。

「純也さんっ、危険です！」

後ろから時雨の叫びが聞こえたのと、震える《鬼》の右手が持ち上がるのは同時で。その大きな手が、細い少年の首をゆっくりと、掴む。

力を込めれば一瞬で砕けてしまう、純也の白くか細い首。僅かに顔を上げた《鬼》の瞳は、闇の虚無。それを見上げる少年の瞳は、光の慈愛。

そつと、純也は左手で優しく、自分の首を掴む《鬼》の手を握る。

「遼……聞こえるよね、遼？ 大丈夫、もう大丈夫だよ。《人間》の遼も僕も、ココにいるよ」

につこりと穏やかに微笑んだ少年の顔に、《鬼》の……いや、遼平の瞳が開く。首から手を離し、その小さな手を握り返した。

「翼……!?!」

その光景を見ていた時雨が、思わずその名を口にす。今、確かに、遼平の前に翼が居た気がして。あの声色、空気は、本当にあの男に似ていて……。

張りつめていた空気は一瞬で消え去り、遼平が膝から崩れ落ちる。その大きな身体を、純也はしっかり受け止めた。

「お帰り……遼」

意識の無い男を心配するように、蝙蝠がその身に寄り添う。全身にわたる傷口をいたわるように、優しく『同胞』の怪我を覆って。もう微かな脈と、小さな呼吸、冷たくなっていく身体。失ってしまつのが恐ろしくて、純也は肩に担ぎ上げて急ごうとする。

「……! 時雨さん……」

少女の遺体を抱き上げてこちらを向いて立つ女性に、純也は息を呑む。今、時雨に復讐されたら……。

「変な人……ですよ。《鬼》と呼ばれて仲間を殺したくせに、知らない少女の死に憤って……それでも、敵を殺さない。本当に、あなただけはわからない……」

「時雨さん……まだ、遼のことを……」  
涙の乾いた弱々しい笑顔で、時雨は純也を……瀕死の遼平を見やる。

「わからなくなっていました。『命を大切に出来る者には《人間の》強さが宿る』と……翼の口癖、遼平は覚えていたんですね。」

遼平が翼を殺したのは《事実》、けれどそれが《真実》とは限らない……。今日のところは、失礼させていただきます」

一礼した時雨が、少女を抱いたまま去っていく。寂れた路地には、純也と遼平だけ。

「あれ……？ フェツキーは??」

いつの間にか消えていた情報屋。確か、キラのリーダーが倒された時までは隣りに居たような……。

「……つばさ……」

今にも止まってしまいそうな呼吸の間に聞こえた、小さな言葉。

純也はその声に我に返って、急いで獅子彦の病院へ向かう。

「遼、悪いけど、まだ翼さんには会わせられないよ。僕、まだ遼といたいんだ」

「自分勝手にごめんね」と謝罪の呟きを漏らして、少年は一回り以上大きな身体を引きずっていった。

……先ほどまで騒がしかった路地に、静かに風が吹く。それをただ一人、傍観する者がいた。ビルの屋上で脚をぶら下げ、荒らされた地上を見下ろす。

「《鬼》の遼平クンに、風使いの純也クン、か。なかなかいいデー  
タがとれたヨ、《ロスキーパー》……まだまだ観察の必要が有りソ  
ウだね」

そして、全ての人間がこの路地から去った。

E L 『愛しき花へ』(1)

E L 『愛しき花へ』

「約束だよ、俺はあなた達の組織に入る。だから、  
「ああ、皆まで言わなくともいい。我々は『スカイ』に手を出さない。契約だからな」

満足そうな笑みを浮かべやがる男へ、翼は決心した顔つきで俺の隣りから一步踏み出していく。

ちくしょう……『翼が組織に入ればスカイを潰さない』なんて条件……俺は反対したのに……！

それでも行っちゃうのかよ、翼……俺達のために、お前は……。

「本当に、本当に、絶対にスカイには手を出さないよね？」

「まったく、そんなに我々が信用できないかね？ ではこうしよう、もうこちらは『スカイ』の名を口にすらない」

「どうかね？」と、どこまでも余裕ぶつた笑みをしゃがって……

！ 殴りかけりたい衝動を、必死に抑える。

「……わかりました。俺は、あなた達に従います」

「ふむ、嬉しいよ。では白鷹翼、早速なのだがね、」

たった今から翼を従わせた男は、その後ろに大勢連れた人間達を見事に隊列させたまま、とても愉快そうに次の言葉を放った。

「命令だ、蒼波遼平を殺せ……！」

「え……っ!？」

男は俺を指差し、翼へ最初の命令を下した。それは、俺の消去。「どういう事ですかっ、もうスカイには手を出さないって……!」「おや? 私は、《君が昔居たグループの名》は口にしていないが? 君の後ろにいる、その男を殺せばいいのだよ。入試試験のようなものだ」

翼が歯を食いしばり、拳をぎゅっと握る。普段は温厚な翼が発する怒りの空気に、男の背後にいたやつらが微かに震えているのがわかる。

「私の命令に従わないならば、契約違反ということで、《君が昔居たグループ》を潰すが?」

なるほどな……最初からその気だったのかよ。なら、俺の選ぶ手段は一つだ。

「翼」

俺が呼ぶと、翼はまだ悔しそうで困惑した顔のまま、こちらへ振り返る。そんなアイツに、俺はいつものにやけ顔をして。

「翼、俺を殺せ」

「遼平……!」

「なにシケた顔してんだよ、俺なんか『スカイ』の名を汚す破壊者だ、出て行くついでに俺を消していけよ」

「違う……違うよ、遼平は破壊者なんかじゃ……」

「……これが、スカイを護るお前の最後の仕事だ、翼」

そんな泣きそうなツラすんなよ……それでもこの裏東京で最強とかって呼ばれてる男だろ? 俺一人殺せなくてどうするんだよ。

東京最強である今のスカイでも、あいつらの組織とぶつかれば勝

率は五割……確実に大勢の死者が出る。それを避けたくて、お前は組織に入ることにしたんじゃないかねーか。  
……迷うな。俺を、殺せ。

「遼平、俺、決めたよ」

「ああそうだ、俺をころ」

アイツは、ずっと昔から変わらない優しい笑みを俺に向けて。

「遼平……俺はお前を裏切るよ。だから、お前は俺を殺して」

……は？

「バツ、お前何言つて……！」

「ね、俺からの一生のお願いだからさ！」

ガキみてえな、悪戯っぽい笑みになって、両手を合わせる。

「もう何度目の……『一生のお願い』だよ……」

「ごめん、今度で本当に最後だと思っからさ。だから……リーダーを、時雨を……『スカイ』を、頼んだよ」

俺の口が、《音》を紡ぎ出す。

やめろ！ 俺は翼を殺したくない！！

《音》は《禁じられた歌》になり、翼の笑顔が苦痛に歪んでいく。

やめてくれ！ 嫌だっ、嫌だっ、翼は俺の……！！

《禁じられた歌》が終止符まで近づいていき、翼が激痛に耐えて、  
「ありがとう」と。

歌い終わってしまった……禁術歌のために俺にも疲労の反動が来る。俺の前に倒れた男は、まだ意識があった。

なんでだ！　なんで俺は歌ったんだ！？　どうして……。

「遼平……俺の最期の頼みを聞いてくれないかな……？」  
「翼っ、俺は！」

急いで駆け寄って、翼の上半身を抱える。その額に内出血の紫が広がっていく……もう、死は止められない……。

「また遼平にお願いしちゃうね。遼平は優しいか、ら……つい甘えちゃうんだよね……」

「お前の願いなら、何だって、何回だって、必ず叶えてやる！　俺の……親友の頼みなら……！！！」

「初めて俺のコト、『親友』って呼んでくれたね」と、すごく嬉しそうな笑顔をしゃがって……そうだ、俺はお前のこと、ずっと親友だと思ってた……。

そうか……だから、お前に頼まれると、願われると、俺は断れなかったんだな……だから、歌ったんだな……。

「コレを」

「ああ、必ず、必ず。だから、安心してくれ」

「ありがとう……遼平。遼平が親友で、本当によかつ……」  
不意に途切れる言葉。はっとして翼の瞳孔を覗くと、もう光を失

っていた。……なのに。

「生きてね」

確かに、最期にアイツの口はそんな音を出した。もう意識は無いはずなのに、最後まで……最期まで、お前は俺のことを……。

「ふん、白鷹は我らの手駒にするには甘すぎたか。ならば、蒼波遼平も始末しろ！」

男の命令で、大勢の武装したやつらが俺を殺しに近づく。そつと、翼の亡骸を地面に下ろして、俺は立ち上がった。

翼、俺は今から、《人間》じゃなくなる……同時に、お前の親友である権利もなくなる……ごめんな。

「壊してやるよ……てめえら全員俺が壊すつ！ 苦しみ、泣き、鮮血を噴いてここで……っ、死ねえええ！……！」

正直、その後のことはよく覚えてねえ。ただ、悲鳴と生温かい液体と紅を、俺は身体で感じていて……気が付いたら、俺は数多の屍の上に立っていた。

これから……どうすればいいんだ？

この契約のことは、スカイのメンバーは誰も知らない。リーダーさえも。

《真実》を知ったら、メンバーのやつらは、時雨は、絶対にあの組織に復讐をしようとする。そうになったら、翼の願いが、水の泡じやねえか。

なら、どうすれば…… スカイが、時雨が死なない方法……あの組織の存在に、あいつらが気づかなければ……。

《俺》が敵になれば……！

それだ、翼の仇が《俺》なら、絶対に誰も死なない！ 俺が『裏切り者』になって、生き続ければいいんだ。そうすれば、スカイは、時雨は、《俺》への憎しみが生きる糧になる。翼の死に絶望しても、《俺》への復讐が、生きる支えになる！

たとえどんなカタチでも……俺は、スカイを護る。

ああ、俺が《破壊者》に生まれた罪は、同時に大切なヤツの願いを叶えられる力になるんだ。

「翼……俺はもう、愛を求めねえよ。もう、誰も求めない。もう、誰も俺の犠牲にさせねえ」

それが俺の、  
《定め》なんだ

。

EL『愛しき花へ』（2）

「おい純也、いい加減マトモな食事をしろ」  
「でも、先生……」

病室に入ってきた獅子彦が、ベッド横のイスに座る純也に声をかける。ベッドには、ずっと目を覚まさない男。

「手術は成功している。後は、意識が戻るのを待つだけだろう。そんなに心配する必要は無い」

「だって、もう四日もこのままで……」

ずっと涙を堪えているのがわかる、少年の震えた声に闇医者は悩み……そして、決めた。

「遼平は必ず目を覚ます。翼に頼まれたから……護るために、必ず戻ってくる」

「やっぱり遼は翼さんを裏切ってないんだねっ？」

「……こいつはな、本当に馬鹿で不器用で……強いヤツなんだよ。幼い頃から愛を与えられなかったせいで、自分の存在価値を知らない。初めて愛情を覚えてくれたスカイという《家族》を、本気で愛しているんだ。今もなお」

《真実》の核心は語らない、獅子彦の遠い眼。それでも、何故か純也には、純也だけには、遼平の想いを知っていてほしかった。

「だから純也、お前は、遼平を見放さなくてくれないか。こいつが自分の価値に気づけるまで」

純也の答えが返ってくるのが怖かったが、それは杞憂に終わる。

「うん、僕が生き続ける限り。遼の大きな価値を、僕の手で気づか

せてあげられたら」

(わざわざ言うまでもなかったか)と、苦笑して獅子彦は純也に食事を促す。「遼平は俺が診ているから」と。

それに頷いて純也が席を立とうとしたそんな時、不意に寝ていた遼平の指が動く。

「遼!?!」

「っ、あー……?」

状況のわかつていない遼平が、ぼーっと天井を見つめ、しばらくして横に立つ純也へ顔を向けた。

「あ、ああ……遼……戻ってきてくれたんだ……」

「は? っ、おい純也!」

力無く床に座り込んだ純也に驚き、遼平は上半身だけ起きあがらせる。近くに獅子彦が立っていることに気づき、『どうなってるんだ?』と瞳を合わせて心で尋ねた。

「お前が昏睡状態で四日も眠ってたんだよ。俺の腕と、渋谷に棲む蝙蝠達に感謝しろよ。お前一人の『覚醒の調べ』だけじゃ、身体が保たなかったんだぜ? 歌の効力が切れた後、蝙蝠達が《音》でお前の覚醒状態を継続させたらしい」

「そうか……今度礼を言いに行かないとな」

「あと、忘れるなよ、一番大切な恩人を」

そう言っつて獅子彦が指差した先には、まだ泣き崩れている純也。どこまでも翼に似ている少年、他人のために泣いてしまうその姿さえ。

「ったく、いつまで泣いてんだ純也。とりあえずイスに座れよ」

「だつてさ、遼が……わざと時雨さんに殺されようとしたからっ」

困った表情の男の前で、少年は安堵なのか泣き続ける。両眼を押さえるが、雫は止まらない。

「遼は死にたいのかなって思ったけど、でも、僕は死んでほしくない

かったし……けど、遼の命だから、僕はワガママ言っちゃいけないのになって……」

かなりの葛藤をずっと心に秘めていたらしく、言葉の順序など考慮できないほど素直にそのまま声に出していく。そんな純也に、遼平は。

「……おい純也、お前何か勘違いしてねえか？」

「え？」

もはや呆れを含んだ男の声色に、少年は顔を上げる。大きなため息を吐いて。

「別に俺は、最初っから死ぬ気なんて無かったぞ？俺はただ、時雨にヤボ用があっただけだ」

「でもっ、時雨さんに抵抗しなかったしっ」

「俺はあんくらいの傷じゃ死なねーことぐらい、お前も知ってる？これで少しは時雨の気が晴れば、と思ったんだ」

「本当にっ？」

「ぐ……そ、そりゃ、あんな時雨の顔見てたら、『復讐を果たさせてやるべきかなー』とか思ったり思わなかったり……」

親の逆鱗に触れそうで恐れる子供のように、遼平の語尾が段々と小さくなっていく。「バカ遼ー！！」と鳩尾をモロに正拳突きされ、悶絶する遼平。

「ぐあああ！？そ、そこ、傷口……っ！」

「よくやった、純也。もう一度傷口開け、俺が何度でも縫合してやる」

「てめっ、獅子彦！それが医者 of セリフか！？」

痛みで半泣きになりながら、遼平は闇医者を睨む。今怒ったと思ったら、また少年は泣き始めて。

「遼が何かを護ろうとしてるのはわかるよ、でもさっ、それじゃ遼の『心』はどうなるの!？」

「……んなこと、考えたことも無かったな。俺は、」

『親から存在を望まなかったのだからそんな価値は無い』と言いかけて、やめた。これ以上、自分の重荷をこの小さな少年にまで担がせたくなかった。

だから、代わりにその場しのぎの言葉を。

「悪かった、純也。ありがとな」

軽い、上辺だけの言葉。(またこいつは独りで……)と、獅子彦は遼平に苛立ちと尊敬の念すら、同時に感じて。この男は、他人に心開くことなど二度と無いのだろうか。独りで、闇を背負うのだろうか。

「僕、遼にもう会えなくなるんじゃないかって思って……」

「ああ、俺はもう、お前に……ロスキーパーに戻る気は無かった。

東京のどこかで生きていくつもりだった」

「じゃあ、遼はどこかへ行っちゃおう!？」

怯えて震える青い瞳と、腕をぎゅっと握ってくる白い手。全てはその身を巻き込みたくないだけなのに。

「……行かねえよ、どこにも。こんなチビを残して行けるかっての」

その白銀の髪に手を乗せるのは、不器用な彼の感情表現。男は気づかない、それが自分の『心』の想いだというコトに。

（遼平が己の価値に気づくのは……もうそんなに遠くないかもな）  
闇医者は嬉しそうに口元を引き上げていた。

『E』『愛しき花へ』(3)

「さあーで、ここでお待ちかねの治療費発表！」

「げっ」

そろばんを取り出した闇医者に、男の顔が引きつり、少年の涙が止まる。「願いましてーは」と楽しげに玉を指で弾いていく。

「純也は軽傷だが、遼平の手術代に輸血代、更に四日も入院した費用でー……」

すごく嬉しそうに慣れた手つきで玉を弾いていく音に、グングンと患者二人の顔が悪くなっていく。

「な、なあ獅子彦、今回は仕事じゃないから依頼料も入ってないわけだし……」

「ああ、心配するな、その辺は考慮してやる。俺だって鬼じゃない……っというワケで、今回の治療費は、一千万だ！ なんてお買得！！」

「いつ、一千万っ！？」

純也はイスから転げ落ち、遼平は再びベッドへ倒れて。失神したのかと思ったら、二人はすぐに起きあがって。

「充分鬼じゃねーか！ このぼったくり詐欺医者が！！」

「先生っ、僕達の生活費があー！！」

喚く二人の前で獅子彦はチツチツと軽い笑みで指を振ってから、言い放った。

「命の値段、プライスレス」

「闇医者に言われたかねえー！」

「なんだ、これだって俺も医者だぞ。無免許だけど」

「先生……『プライスレス』って言うのに、一千万取るんだね……」

「文句があるのか？ 俺は治すこともできるが、もう一度傷を再現する技術もあるが、体験したいか??」

「……すみませんでした、払います」

瞬時にメスを構えて突き出した闇医者に、深く患者達が頭を下げる。「じゃ、分割払いで許してやろう」との、寛大で残酷な獅子彦の言葉に、もう誰も何もう気力が無かった。

「あ、そうだ、お前らに手紙を預かってるぞ」

俯いて落ち込みまくっている患者二人の前で、思い出したように白衣のポケットから二つ折りの紙を取り出した獅子彦は、ソレを遼平の手元へ落とす。読む気力すら無くなった遼平の代わりに、純也が声を出して読み上げた。

「えーっと……あ、時雨さんからだ！ 『ご都合がよろしければ是非おいでください』……？ これ、どこの住所だろ??」

綺麗な筆文字で、短い文章とどこかの住所。予定の日には、ちよつど今日。

「時雨だと？ おい純也、俺の上着返せ」

「え、うん」

ベッドから立ち上がり、純也が差し出した上着と手紙をひったくる。上着のポケットに手をつ込んで何かを確認してから、病室から出て行くこととした。

「ちよつと遼、待ってよー！」

「純也、お前は来るな」

「何かあるかわからないじゃないかっ」

「だから来るなって言ってるんだよ」

「……遼平、純也も連れて行け」

「は？ 獅子彦、お前何を勝手に」

煙草を箱から一本取り出しながら、獅子彦は言っていた。睨むような遼平の眼は見ずに。

「お前の骨格は凄く理想的な形してんだよ。純也、こいつが死んだら遺体を持ってこい。骨格標本にしてやるから」

「ンだとコラア！」

「うん、わかったよ！ 遼行こう！」

嬉しそうに笑って、純也は遼平の手をとって病室を出た。静かになった部屋で、獅子彦は煙草に火を点ける。

「……ありや、当分死にそうにないな……」

まだ夏の日差しが残る青い空の下。手紙の住所を頼りに、純也が指定場所を探す。

「……純也、お前に謝らねえといけないことが……」

「ん？ 先生の治療費ならしょうがないよ、いつものコトだし」

「違えよ。俺は、時雨に会って……お前との《約束》を忘れてた。

『絶対だ』って約束したのに……」

「……いいよ、気にしないで。遼の中で、僕との《約束》が一番じゃなくていい。覚えていてくれただけでも、嬉しいよ」

微笑む少年を見下ろして、きつとあの約束は果たしてやろうと誓う。いつの日か。

「あ、そうだ遼、時雨さんがね、『《事実》が《真実》と同じとは限らない』って言ってた。だからさ、いつか時雨さんには《真実》

を話してあげてね」

「……」

目を閉じて男は黙り込む。それが肯定であつても否定だとしても、純也は構わなかったが。

その決断は、遼平の優しさなのだから。

「ココ……みただけど」

「なんだあ、ココは？」

しばらく歩いて、ようやく見つけた目的地。

未だに木造建築の、とても古ぼけた 教会。夜だつたらお

化け屋敷になりそうな。

「とりあえず、入ってみようか」

大きさのわりには軽い扉を押し開く。二人と共に、光が薄暗い教会に射し込む。

教会の奥に二人の影があつた。遼平と純也は赤い絨毯の上を進んでいく。

「来てくださつたんですね」

黒い着物の女性が振り返る。その顔は微笑みながらもどこか寂しそうだった。

「時雨、これは……」

「この子の、葬儀です」

時雨が左にどくと、小さな棺がそこにはあつた。中にはその棺さえ大きく見える小柄な少女。

「あ……ごめんなさい……」

時雨はゆっくりと首を振り、純也の肩に手を置いた。

「あなたの責任ではありません。どうか、顔を上げてください。私はただ、彼女に花を捧げてほしかったのです」

「花？」

「ソウソウ、構えルことなんてナイんだよ」

「な……てめえは！」

奥で気配を消して立っていた神父が振り返る。この場には似つかないテンションで言い放つて。

「フェツキー!?」

そこにいたのは厚い修道服をまとったあの情報屋だった。

「なんて格好してんだ、てめえ……」

「なんて、八無いでシヨ。だってここはボクの教会ダもん。ボクは神父なノッ」

「ええ!?」

「はあ!?」

二人は同時に素直な声を上げる。情報屋をやりながらこんな古い教会で神父をやっていたとは……。兼業がどうか言う前に、あまりにも不似合いな職業と思えた。聖職者というのは、もう少し落ち着いた着きのある人間ではないか？

「ア、今『似合わない』ト力思ったでシヨ？」

「ご、ごめん……」

「だってマジで似合っつてねーもん」

「ムムー、キミたちだって警備員なんて不相応だヨっ」

「ンだどこのマリモキリシタンがっ！」

「また差別発言するカー！」

睨み合う遼平とフェイズ。その間に純也が入って、なんとか二人を宥めすかした。フェイズも葬儀の時くらい黙っていられないのだろうか。

「すみません時雨さん、こんな時まで……」

「ふふ、いいですよ。賑やかに見送ってあげたほうがこの子も喜ぶでしょう」

そう言って二人に淡い紫色の花を渡す時雨。花を受け取る時に遼平の手が、僅かに震えていた。

「この子を知る人は少なかつたんです。だからせめて、あなた達には来ていただきたかつた」

「俺にそんな資格が有ると思うのか？」

「はい、今は」

「なんでだ……」

伏せられる遼平の瞳は、隠せないほど己を責めていた。俯いて震えるのは、悪役を演じなければならぬのにそれが出来ないから。

「今は、あなたに看取ってほしい。何故かは私自身わかりませんが、ただ、そう想うんです」

先にしゃがんで棺に花を捧げている純也に続き、遼平も少女の顔の横に花をそつと置く。

「菖蒲か……。あんたが好きな花だつたな」

「覚えていたんですね。でも、この子も菖蒲が好きだつた。好きな花で、最期を」

「そつだな」

一番最後に時雨が菖蒲の花を棺に入れる。そしてフェイスが短く英語で祈りの言葉を捧げた。

三人は後ろで静かに佇む。時雨と純也は俯いて目を閉じていた。

「……ハイ、終わりだヨ。みんな暗い顔しないで、笑顔で送ってあげるのがココのルールね」

「うん、そつだよね」

顔を上げた純也に笑顔が戻る。時雨も微笑んで、遼平達に振り返った。

「ありがとうございました」

「いえ……」

「時雨」

「遼平？」

名を呼ばれて、時雨は遼平を見る。遼平は斜に構えたまま、目を合わさずに正方形の小さな箱を上着のポケットから取り出し、放り投げてよこした。

「これは？」

「……翼からの預かり物だ。長い間渡せなくて、悪かった……」

小さな箱を開けると、銀色の指輪が輝いていた。その真意を悟り、時雨は口を押さえる。

「もしかして、野暮用って……」

「ちゃんと渡したからな。あいつの思い……受け取ってやれよ」

背を向けて遼平は歩き出す。純也も時雨に一礼してその後を追った。

『コレを、時雨に……。俺、直接渡せなかったから……』

翼の言葉を思い出して、「叶えたからな」と誰にも聞こえない咳きを。

時雨はただ呆然とその背中を見ていた。ただ、無意識に瞳から雫が落ちて。

「翼……遼平……ありがとう……」

ぎゅっと指輪を両手で握る。三年の月日を経て届いた思い。もう返事することは叶わないけれど、それでも答えはわかっていてくれただろう。

朝露で光る菖蒲の如く、時雨の涙の笑顔は輝いていた。

依頼3 《朝露の菖蒲》 完了

EL『愛しき花へ』(3)(後書き)

ここまで『闇守護業』第三話を読んでいただき、感謝申し上げます。もしご迷惑でなければ、このシリーズの続編も書いていきたいと存じます。

何かありましたら、是非コメントに残していつてください。  
ありがとうございました。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6711a/>

---

闇守護業 3 《紫花》

2009年7月2日03時57分発行